フランス人民戦線研究の新動向

平田好成

目次

まえがき
一　社会運動及び労働組合運動史研究所の内容と活動状況
二　フランス人民戦線期の新しい研究状況
三　J＝ジロー編著の内容と問題点
むすび

まえがき

昨年（一九七八年）三月十日付けパリ発信の一刊行物が、筆者の手許に届いた。その刊行物は、パリ第一大学（パンテオン－ソルボンヌ）に設置されている労働組合運動史センター Centre d'Histoire du Syndicalisme CHS 雑誌第一号（一九七六－一九七七年大学年度）であった。それは、タイプ印刷による一二六頁に上るB5版の刊行物である。(1) この刊行物が筆者の所に届けられたのは、多分筆者が以前から、『社会運動』le Mouvement social 誌等の定期購読者であり、筆者の名前が日本での研究者リストの中に記録されているからであろう。筆者は、その後、パリ第一大学の歴史学の講師 maître-assistant で CHS の幹事を務めているジャック＝ジロー Jacques Girault 氏と交信する機会を持った。筆者

が刊行物恵送の礼状を書いた後、同年六月二十一日付けパリ発信で同氏から返事が届き、色々な配慮をして頂ける趣旨のことが簡単に書かれていた。その後、筆者は、一九七七年十一月に公刊した拙著『フランス人民戦線論史序説』（法律文化社）[2]に Réflexions historiques sur Essais du Front populaire en France という仏訳を付け、かつ目次及び内容のエキスをレジュメとして外国用便箋六枚程にタイプして、送本した。J＝ジロー氏から同年九月十三日付けパリ発信で礼状が届き、もし前出雑誌第一号の中で読みたい論稿があれば複写 reproduction して送り届ける旨の好意ある内容のことが書き記されてあった。筆者は、厳密に数点の論文のリスト＝アップを行い、目下J＝ジロー氏に所望している。

ＣＨＳは、一九七八年半ば頃から、社会運動及び労働組合運動史研究所 Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme ＣＲＨＭＳＳ に改称し、発展している。この研究所は、毎週月、火、木、金曜日の十四時から十八時まで開所され、利用者の便に供されている。

一　社会運動及び労働組合運動史研究所の内容と活動状況

社会運動及び労働組合運動史研究所の前身である労働組合運動史センターＣＨＳは、一九六六年十一月二十五日、パリ第一大学学長主宰の下に開催された創立集会で設立された。その後約十年間、ＣＨＳは、文学博士で講師のジャン＝メートロン Jean Maitron の独創性豊かな推進によって繁栄を続けた。一九七六年六月、前記したJ＝ジローがＣＨＳ幹事として後継者となった時点で、一つの区切りが付けられ、前出の雑誌の創刊号が発行された。[3]

ＣＨＳ設立の目的は、ＣＨＳ規程第二条が明記しているように、「労働組合運動史に関する研究を発展させ、調整しかつ援助すること」であり、「その歴史に関係のあるあらゆる種類の資料と同様に、労働者及び経営者組合の文書及び刊行物の研究、保存並びに開発」を行うことである。ＣＨＳ規程は、全七条から成っており、その第一条は、ＣＨＳが、一九二〇年七月三十一日付政令第三条により、文学人間科学部及び法経済学部の学術的指導の下で、パリ（第一）大学に創設

されることを規定している。第二条は、前記したＣＨＳの目的を謳っており、第三条は、都合十八名による理事会の構成及びその内容を具体的に規定している。理事長は、パリ（第一）大学学長である。第四条は、このセンター所長に関する規程であり、現在その所長は、ジャック＝ドローズ Jacques Droz（パリ第一大学教授）が務めている。第五条は、他の学術機関との協力に関する規程であり、第六条は、資料の閲覧及び利用等に関する規程であり、第七条は、センター予算に関する規程となっている。このセンターの雑誌は、今後各大学年度に発刊される予定となっている。従って、その第二号は、一九七七－一九七八年大学年度に出版予定のはずであり、それは今年三月上旬に筆者の手許に届いた。（付記）この雑誌によって、センターの活動状況やフランスの他の研究所における社会運動史及び労働運動史の研究状況等が報告されることになっている。この雑誌はまた、フランスの各研究所間の連絡機関誌という役割をも荷なっている。(4)

この研究所の創設の動きは、一九六二年に遡る。Ｅ＝ラブルース Ernest Labrousse（ソルボンヌ名誉教授）らの主導権が瞠目される。この時点から、労働組合運動史、より広くは労働運動史の科目が、公式にフランスの大学に導入された。一九六六年の最初の理事会の会合には、大学関係者、それに経営者、労働者及び協同組合組織のそれぞれの代表者が参加した。前記した通り、この研究所は、パリ第一大学の創設のさい、この大学に付設された。

ソルボンヌ街十六番地にあるこの研究所の一室には、労働組合指導者（ミリタン）の文書や労働組合組織の文書等が収められている。この研究所は、フランス社会史研究所 l'Institut français d'Histoire sociale の資金を豊富にすることに貢献している。研究所の図書館は、特別の寄金によって創設された。本研究所は、前記した『社会運動』誌の編集に参加し、マスペロ社 Editions François Maspéro から出版される独自の叢書（コレクシオン）を持ち、現在まで六点程の著作物が出版されている。

この研究所は、修士号論文 mémoire de maîtrise や学位論文 thèse を準備する学生を含む研究集団を庇護している。さらに、多数の教授陣がそれに協力している。研究所は、パリの各大学（とくにパリ第八、ナンテール及びパリ第七）あるいは地方の各大学（トゥールーズ、ブザンソン等）と活動上の実り多い関係を維持しているからである。研究所内では、

色々な研究動向が共存している。その中の大きな軸は、次のようになっている。J＝ドローズは、とくにドイツ、反ユダヤ主義、それに強制移住の問題について研究指導を行った。J＝メートロンは、とくに労働組合運動及び無政府主義について研究指導を行った。J＝ジローは、とくに政党（主として社会党、共産党）の、とりわけ定着の問題について研究指導を行った。マドレーヌ＝ルベリュー Madeleine Rebérioux は、とくに労働者文化の問題で研究指導を行った。ルネ＝ガリソ René Gallissot は、とくに植民地及び民族問題について研究指導を実施した。これらすべての労作は、研究所図書館で参照することができる。その中でも最良のものは、近くマイクロカードで再生される予定となっている。

数多くの困難が現われ、それらがこの研究所の生活に重く伸し掛かり続けている。その中でもとくに、研究所予算の不足が顕著に見られる。研究所予算としての年間一二、五〇〇フランは、極めて僅少な額であり、それは、大学で授業が行われる期間中だけ前記した週に四日の午後図書館を開館することや、若干の所蔵図書及び雑誌を購買すること等を保障しているに過ぎない。パリ第一大学所属の三人の教官が、研究所関係のサーヴィス業務を分担している。六、〇〇〇冊以上の著書及び雑誌や五〇〇種近くの学生たちの未発表論文（高等研究課程修了証 Diplôme d'Etude Supérieure DES 論文、修士号論文、学位論文等）の特別図書を管理する場合及びフランスや外国の研究者や学生たちの多様な要求に応える場合、こうした施設予算等の不備が遺憾とされている。このように、本研究所は、より効果的な研究活動を行う可能性をほとんど持ち合わせていない。しかし、一九六八－一九六九年度に行われ、現時点で労働組合の中央諸組織の助力によって再開されている労働者組織の文書についての調査等が、地道に行われている。

本研究所の歴史学法学センター（パリ七五〇〇四、マレル街、九番地）への移転が、一九七七年大学年度の期間中に行われる予定になっている。研究所はそこで、もっと大きい面積を保有することになっている。この新しい移転が、理事会再編の絶好の機会となり、恐らく社会運動史や労働運動史の分野で試みられる新しい企画の意味を確定するであろう。(5)

次に、この研究所が行った、一九七六－一九七七年度の活動状況は、おおよそ次の通りである。研究所は、一九七六－

一九七七年大学年度に前年度決定された方向で機能し続けた。すなわち、深化高等研究課程修了証 Diplôme d'Etude Supérieure Applofondie DESAの学生たちのセミナーや修士及び第二課程（サイクル）の学生たちのセミナーが実施された。幾つかの重要な仕事が、これらセミナーの枠組の中で実行された。研究所は、社会史を研究する外国の研究所、フランスにおける労働組合の中央諸組織、経営者の組織、協同組合の組織、それに理事会に参加できる各教官もしくは研究者たち、さらに社会主義史センター le Centre d'Histoire du Socialisme 等々の機関と、それぞれ緊密な相互関係を結んだ。

継続もしくは研究所の枠組の中で行われた研究の中で、とくに次のものが注目される。研究所の所有する諸文書の分類、戦前の全国教員組合SNIの指導者（ミリタン）についてJ＝ジローの行っている調査の続行（この調査は、その最終段階に入っており、七〇〇人近くの教員が質問を受けた。『両大戦間における教員指導者』le "militant instituteur dans l'entre-deux-guerres" という著作物の刊行について、全国政治学協会出版部との間に出版の協定が締結されている。）、J＝ジローらの指導に成る、両大戦間の時期における外国人の帰化に関する九、〇〇〇の書類の検討及び満足すべき取り扱いのための法典編集の開始、労働組合中央諸組織の支持で行われている、全国連盟、県連合及び労働紹介所に関する一九四四－一九四八年期の総合調査の開始（この調査には、他の研究者らが協力しており、かつ全国学術研究所 CNRS の援助要求対象になる可能性が強い。）が、すなわち、その中味である。

研究所は、幾つかの注目すべき討論集会を計画した。例えば、一九七六年十一月二十六、二十七、二十八日に、CHSは、ジョーレス研究協会及び全国学術研究所と、『ジャン＝ジョーレスと労働者階級』の討論集会を共同で組織した。CHSは、一九七六年十月初めに、モンペリエ大学によって組織された『ラングドックールシィヨン地方における経済と社会』の討論集会に参加し、そこで、J＝ジローが、一九三〇年代における教員労働組合運動について報告を行った。また、研究所は、一九七六年十月二十二、二十三、二十四日に、CHSによって組織された人民戦線に関する討論に参加し

たが、その詳細について、筆者はまだその資料を確証していない。

前述したように、CHSは、一九七六－一九七七年大学年度においても、とくに編集幹事J＝ジローの仲介によって『社会運動』誌の出版に協力してきた。また、マスペロ社を通じて、CHS叢書（コレクシオン）に数えられる数点の著作物が、この年度に刊行された。例えば、印刷中とされているM－Ch＝バルドゥイヱ Marie-Christine Bardouillet の『労働出版物、一九一七－一九三九年』La Librairie du Travail, 1917-1939 は、現在すでに発刊され、筆者も入手している。これらの出版物以外に、CHSでのセミナーの結果をまとめた刊行物が、エディシオン＝ソシアール Editions Sociales 社から出版された。この本が、後の章で論述する『両大戦間におけるフランス共産党の定着について』Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres という題名の刊行物である。筆者の手許に届いたCHS雑誌第一号は、パリ（第一）大学のコピー印刷所で作成され、センターに提出された五〇〇の原稿（修士号論文、学位論文等）のテーマごとの校訂、CHS文書の分類目録の最初の部分及びセンターで閲読できる出版物、雑誌並びに新聞のリストを掲載している。

最後に、修士号論文及び未刊行の他の労作のマイクロフィッシュによる複写に関しては、すでにオーディル l'Audir 出版社との間で協定が締結されている。また、フランスの共産主義及び社会主義に集中している二十一の著作物の最初の部分が、全部準備され、一九七七年六月半ばに出版者の意向に任されている。早晩、これらの資料が入手できれば、研究密度が一挙に上昇するであろうと展望できる状況が生まれている。(6)

二　フランス人民戦線期の新しい研究状況

前述したように、労働組合運動史センター雑誌第一号は、センターの活動状況、その豊富な資料、そしてその文書を知る可能性を示している。第一号は、次の内容を含んでいる。J＝ドローズ及びJ＝ジローによる一般的問題提起（前述）、

一九七六－一九七七年度活動状況報告（前述）の次に、センターに登録された高等研究課程修了証論文、修士号論文、学位論文のリストが載せられている。これらの論文は、幾つかの見出しで分類されている。すなわち、伝記、方法論、資料と、フランス（政治史、経済社会史、文明史、地域、県、地方史）と、世界（旧植民地、国際労働運動、外国）が、それである。ただ、分類項目によって、一つの労作が幾つかの見出しに重複してタイプされているのが目立っている。第一号は、続いてセンターの保存する定期刊行物のコレクション状態を示し、かつ目録の初めに登録されている文書を提示しており、他の資金によるものは、現在その目録を作成中である。(7)

人民戦線期に関する主な論稿は、次の通りとなっている。

Philippe Robrieux: *Maurice Thorez*, avant et après le XX° congrès (Mémoire CHS)

Bernard Foutrier: Le PCF, la psychologie et la psychanalyse (1920–1973), travail bibliographique, (Mémoire CHS)

Annie Dreyfus: La vie politique dans une commune de banlieue, 1870–1936, (Mémoire, DES, CHS)

J. M. Bontemps et J. Jolinom: La municipalité de Montreuil sous Bois de 1900 à 1939 (Mémoire CHS)

Marie-Christine Bardouillet: La Librairie du Travail, 1917–1939 (Mémoire CHS)

F. Castaing: Les jeunesses communistes, origines et formation 1919–1921 (Mémoire CHS)

François G. Dreyfus: Les élections législatives en Alsace 1919–1936 (Thèse complémentaire)

Françoise Poulet et Jean-Michel Cordier: Le mouvement anarchiste francais et la guerre (1914–1939), (Mémoire CHS)

Charles Blanc: Le Parti communiste et l'unité de la Gauche à travers *L'Emancipateur*, hebdomadaire communiste du centre de la France (1930–1936), (Mémoire CHS)

Jacques Boutonnet: L'implantation du Parti communiste à Pantin dans l'entre-deux-guerres (Mémoire CHS)

Santiago Caamano: Les causes et les conséquences de l'avènement d'Hitler à travers la presse communiste et la presse socialiste (janvier 1933–juillet 1934), (Mémoire, Vincennes)

Françoise Cahier: La classe ouvrière havraise et le Front populaire 1934–1938 (Mémoire CHS)

Bernard Chambaz: L'implantation du Parti communiste français à Ivry pendant l'entre-deux-guerres (Mémoire CHS)

Emmanuel Chaudeurge: Les paysans et le Front populaire dans l'Orne (Mémoire CHS)

Anne-Marie Chères: Visions du communisme dans *le Populaire*, mai 1932–juillet 1934 (Mémoire CHS)

Maryvonne Corbier: La SFIO vue à travers l'Humanité de 1932 à juillet 1934 (Mémoire CHS)

Frédéric Dabouis: Le Parti ouvrier-paysan, une scission de droite du PCF pendant la 3° période (Mémoire, Paris VIII)

Jean-Claude Daumas: Le pacte d'unité d'action socialiste-communiste du 27 juillet 1934 et la dégénérescence révisionniste du PCF (Mémoire, Nanterre)

Alain Droguet: Le mouvement anarchiste-communiste français de 1929 à 1939, vu à travers ses congrès; suivi d'une bibliographie de la presse anarchiste française de 1929 à 1939 (Mémoire CHS)

Josiane Garnotel ép. Oboeuf: Etude de presse: *Le Libertaire* quotidien, du 4 déc. 1923 au 26 mars 1935 (Mémoire CHS)

François Giacomini: L'implantation du Parti communiste en Corse, 1920–1939 (Mémoire CHS)

Jean-Yves Guiomar: Etude des relations entre les mouvements régionalistes, fédéralistes et autonomistes et

les partis français de gauche de 1919 à 1939 (DES, CHS)

Philippe Gumplowicz: Le Parti socialiste ouvrier et paysan (Mémoire CHS)

J. C. Herschon: La Fédération nationale des jeunesses communistes en 1923–24 (Mémoire CHS)

Jean-Louis Humbert: Les tendances à l'intérieur du Parti socialiste au lendemain de la scission néo (nov. 1933) aux élections législatives de 1936 (DES, Paris)

Noomane Kacem: L'IC, le PCF et la question tunisienne jusqu' à l'indépendance (1956) (Mémoire, Paris VII)

Jean-Louis Kreyts: La presse communiste française devant l'occupation de la Ruhr, 1923 (Mémoire CHS)

Claude Kroviarski: Problèmes de l'implantation du Parti communiste dans le XI° arrondissement de Paris pendant l'entre-deux-guerres (1919–1939) (Mémoire CHS)

Lafon–Zarka: Recherches sur l'implantation du PCF à Nanterre (Mémoire CHS)

Jacqueline Legoyet: L'alternative révolution ou fascisme en Allemagne entre 1928 et 1933 vue par les syndicalistes révolutionnaires de la *Révolution Prolétarienne* (Mémoire CHS)

Ginette Lemarchand: Le Front populaire à Caen 1934–1936 (DES, Caen)

Markovits: Le Parti communiste et la question coloniale de la guerre du Riff au Front populaire (1925–1936) (Mémoire CHS)

Liliane Matusiak: Le SNI et le Front populaire (Mémoire CHS)

Christophe Mélinand: Pivertistes et trotskystes (Mémoire CHS)

Annie-Claude Menguy: La presse radicale et radicale socialiste devant la montée nazie de 1930 à 1933

(Mémoire CHS)

A. M. et C. Pennetier: Influence et implantation de la fédération communiste du Cher (1921–1936), (Mémoire CHS)

Gisèle Piner: Le Parti communiste et la nation, 1936–1939, étude du Vocabulaire communiste à travers *l'Humanité* (Mémoire CHS)

Pascal Plagnard: Recherches sur l'implantation du Parti communiste dans le 13° arrondissement de Paris (Mémoire CHS)

Françoise Poulet et J. Michel Cordier: Le mouvement anarchiste français et la guerre (1914–1939), (Mémoire CHS)

Jenny Prager: La Fédération de la Seine de la jeunesse socialiste entre 1934 et 1939 (Mémoire CHS)

Adeline Richet et Claude Rochet: Mouvements fascistes français et riposte populaire dans la presse communiste et socialiste, 1934–1937 (Mémoire CHS)

G. Transberger: La contre-offensive patronale de 1936 à 1938. Le patronat catholique (Mémoire CHS)

Françoise Vanacker: Le mouvement anarchiste à travers *Le Libertaire*, 1934–1939 (Mémoire CHS)

Yves Bessemoulin: Etude de presse d'un journal communiste libertaire, *Germinal* 1919–1938 (Mémoire CHS)

Marianne Caron: Le Front populaire dans le Bas Languedoc et le Roussillon (Thèse 3° cycle, Montpellier)

Dominique Candille: Le Front populaire dans la vallée de la Meuse, 1930–1937, (Mémoire CHS)

Micheline Chantada: L'implantation du PCF à la Courneuve pendant l'entre-deux-guerres (Mémoire CHS)

Michel Cointepas: Le débat sur le Front unique dans la fédération du Nord du Parti communiste (SFIC),

1921–1923, (Mémoire CHS)

Patrick Combe: L'insurrection de Vienne (février 1934) et l'insurrection des Asturies (octobre 1934) à travers la presse communiste et socialiste. Leurs conséquences sur l'élaboration du Front Populaire (Mémoire CHS)

Alain Corbin: Prélude au Front populaire: l'opinion publique dans le département de la Haute-Vienne (Thèse 3° cycle, Poitiers)

Monique Gaultier: Le Front populaire dans le département du Cher (Mémoire, Tours)

Jean-François Gelly: Recherches sur les problèmes de l'unité organique du PCF et de la SFIO à travers des sources diverses sur les deux partis du 27 juillet 1934 à la fin de 1937 (Mémoire CHS)

François Guégan: Le PCF, la SFIO et le mouvement paysan et ouvrier de 1930 à 1939 dans les Côtes du Nord (Mémoire, Vincennes)

Jean-Pierre Guillerot: La politique agraire et paysanne du PCF de 1920 à 1934 (Mémoire, Paris VIII)

Philippe Hanen: Le PCF et la SFIO pendant le Front populaire en Basse et Moyenne Corrèze (Mémoire CHS)

Gisèle Jachimiak née Kcakowski: La xénophobie en France (1934–1938). Etude partielle à travers deux hebdomadaires, *Candide* et *Gringoire* (Mémoire CHS)

Jean-Paul Joubert: A contre-courant: le pivertisme. De la "vieille maison" au "Parti révolutionnaire". Etude d'un courant socialiste révolutionnaire entre la SFIO et le PCF (Thèse de sciences politiques, Grenoble)

Salomon Ketz: De la naissance du groupe Bolchevik-Léniniste à la crise de la section française de la Ligue Communiste Internationaliste 1934–1936 (Mémoire CHS)

Daniel Labat: Une tendance du Parti socialiste SFIO: la Gauche révolutionnaire, octobre 1935–juin 1938

(Mémoire, Paris X)

Michelle Labrousse: La vie politique dans la Vienne de 1919 à 1939 (Thèse 3° cycle, Paris X)

Yves Lanchon: L'action antimilitariste du PC et de la JC, 1928–1935, (Mémoire CHS)

Marc Lazar: Origines et débats d'une organisation du mouvement ouvrier: l'ARAC (Mémoire CHS)

Christine Mayet: Le PCF et les catholiques 1933–1939 (Mémoire CHS)

Serge Pey: Structures internes et rythmes de développement de la section d'agit-prop du PCF entre les deux guerres (Thèse 3° cycle, Toulouse)

Jacqueline Pluet-Despatin: Prolétariat et avant-garde, les étapes du mouvement trotskyste en France de 1929 à 1944, enquête sur la presse (Thèse 3° cycle, Ecole HESS)

S. Roujeau: L'implantation du PCF à Villejuif pendant l'entre-deux-guerres (Mémoire CHS)

Alain Runel: Opinion, mentalité, idéologie: le traditionnalisme en Lozère (1930–1945)(Mémoire, Paris I)

Didier Sénécal: Le mouvement ouvrier en Indre et Loire, 1919–1939 (Mémoire CHS)

Jean-Pierre Vaudon: Le PCF aux élections dans les arrondissements d'Issoire et de Thiers de 1920 à 1936 (Mémoire ?)

Jean Védrines: La ligne politique du PCF d'après sa presse clandestine, août 1939–juin 1940 (Mémoire, Paris I)

Yves Dauriac: Le mouvement ouvrier en Charente-Maritime de 1815 à nos jours (Mémoire contributif au dictionnaire biographique du mouvement ouvrier)

Annie Becker: Les transformations de la structure artisanale dans le 3° arrondissement à Paris de 1896 à 1946

(DES, Paris)

Louis Chevalier: Les fondements économiques et sociaux de l'histoire politique de la région parisienne (Thèse, Lettres)

J. Cl. Dufour: Les nationalisations dans l'histoire du mouvement ouvrier français (Mémoire, Droit)

Michel Didier: Recherches pour servir à l'histoire des établissements Bessonneau à Angers des origines à 1939 (Mémoire CHS)

Joelle Gleize et Viviane Tournaire: Renaud Jean et le syndicalisme de classe à la campagne 1919–1936 (Mémoire CHS)

J. Ch. Asselain: La loi des 40 heures et les conséquences de son application (DES, Paris)

Jean-Marie Arnion: L'évolution des conventions collectives du travail (Doctorat Droit, Lille)

Nora Benallègue: CGT, CGTU et étrangers en France entre les deux guerres (Mémoire, Paris I)

Thérèse Duwer et Véronique Favier: Les problèmes des travailleurs immigrés en France de 1931 à 1936 vus à travers la presse: *l'Humanité* et *Le Peuple* (Mémoire CHS)

Françoise Delaveau, Eric Till, Marcel Lecourt: La CGTU à travers les grèves (1930–1933), problème du syndi calisme rouge (Mémoire CHS)

J. J. Aublanc: La lutte pour l'application de la journée de huit heures dans le livre (Mémoire CHS)

Claire Biquard: Les luttes de tendance dans la CGTU (Mémoire CHS)

Jean-Pierre Bonnet: La réunification syndicale en 1936 (DES, Paris)

Claude-Annie Defer: La Fédération CGT du bâtiment au moment du Front populaire 1936–1938 (Mémoire

CHS)

Jean Diemert: Le syndicalisme en Algérie, et plus particulièrement dans la région oranaise, de 1919 à 1938 (Mémoire, Paris VIII)

Stouder: Une expérience d'éducation ouvrière: le Centre Confédéral d'Education Ouvrière de la CGT (1932-1939), Collège du Travail et Institut Supérieur Ouvrier (?)

Pierre Trimouille: Les syndicats chrétiens dans la métallurgie de 1935 à 1939 (DES, Paris)

Philippe David: L'UD CGT de Meurthe et Moselle face à la scission syndicale 1921-1935 (Mémoire, Nancy)

Ho Hai Quang: L'évolution du concept de plan dans le mouvement ouvrier syndical français dans la période de l'entre deux guerres (DES, Sciences économiques)

Samuel Jospin: La CGTSR à travers son journal *Le Combat syndicaliste* 1926-1937 (Mémoire CHS)

Claudine Masse: La CGT à travers son quotidien *Le Peuple*, 1934-1936, (Mémoire CHS)

Gérard Prodhomme: La JOC et l'action syndicale, une pratique sociale militante chez les jeunes ouvriers chrétiens, 1927-1939 (Mémoire CHS)

D. Stéphany: Le personnel de la CGT de 1936 à 1939 (Mémoire CHS)

François Bonnot, Josette Pisano, Marc Lagaize: Recherches des attitudes culturelles dans *Monde*, *Europe*, *Vendredi* (DES, CHS)

Françoise Cardaire: Réception et diffusion de la culture chez un militant: Gaston Monmousseau (Mémoire CHS)

Lise Cortes: Une expérience de théâtre populaire, la compagnie Proscenium 1929-1939 (Mémoire CHS)

Claire Desaint: Attitudes et modèles culturels à travers *Le Populaire de Paris*, 1929 et 1930 (Mémoire CHS)

Michel Popov: Histoire culturelle et socio-culturelle du mouvement ouvrier (Thèse 3° cycle)

Lucien Scoffham: Les problèmes de l'art prolétarien et de la culture prolétarienne à travers *Commune*, revue de l'association des Ecrivains et Artistes Révolutionnaires, 1933–1935 (Mémoire, Paris VIII)

Michèle Chevalier: *"Les Humbles"*, revue littéraire des primaires, 1919–1939. En marge du syndicalisme révolutionnaire (Mémoire CHS)

Alain Chataignier: Ludovic Zoretti et l'éducation ouvrière dans l'entre deux guerres (Mémoire, Sciences politiques, Paris I)

François Delpla: Le Parti communiste et les problèmes de la famille (Mémoire, CHS)

Jean Nicolas: Le syndicalisme et les grands problèmes de l'éducation post-scolaire depuis les débuts de la 3° République (DES, Paris)

Svetlana Ouss: Critique de l'école par les instituteurs révolutionnaires français (1903–1935), (Mémoire CHS)

Annick Castellan: Les grèves dans l'industrie automobile de la Seine, 1921–1930 (Mémoire, Paris VII)

Annie Delaunay: Le syndicalisme chez les instituteurs de la Seine-Inférieure (Mémoire, Rouen)

Choukroun: Le syndicalisme en Algérie et la question nationale de 1926 à 1954 (DES, CHS)

Raymond Guillaneuf: La presse en Côte d'Ivoire, la colonisation, l'aube de la décolonisation 1906–1952 (Thèse 3° cycle, Paris I)

Abdelwalah Majdoub: Le syndicalisme maghrebin (des origines à 1964), (DES, Sc. Pol.)

Georges Idier: Le Front populaire et la presse prépondérante de Tunis (Mémoire, ?)

Aline Naura-Raffalli: Tunis socialiste devant la crise de 1929 et ses conséquences (Mémoire CHS)[8]

フランス人民戦線期の研究は、従来内外ともに、パリ中心に論じられてきた。フランス各地の動向は、極く断片的にしかその射程距離に入っていなかったといえよう。前記した指導演習 travaux dirigés 論文のリストを一覧すれば明瞭なように、ここ十数年の間、フランスの若い研究者たちが、各種の文献を渉猟して、各地域、各県及び各地方を中心に研究の網を拡げているのが読み取れる。これらを網羅することによって、やがてフランス人民戦線の全体的な実像を再構築することが可能となるであろう。

この研究所発行のユニークな雑誌は、もし財政事情が許せば、年間定期刊行物として発刊される予定となっている。前記したように、雑誌第二号が本年初めに出版された。そこには、さらに厚みを増した幾多の論稿が付加されている。(末尾の付記の項参照。)

三　J＝ジロー編著の内容と問題点

パリ第一大学（パンテオン－ソルボンヌ）歴史学講師J＝ジロー編著『両大戦間におけるフランス共産党の定着について』（エディシオン＝ソシアール社　一九七七年）（前出）は、両大戦間期におけるフランス共産党の定着の研究に関する、フランス各地域を主とした文献を中心にまとめられている。すなわち、この編著は、七五〇の論題（テーマ）の文献を包含し、それらの原稿提出は、一九七五年春に行われた。この編著は、J＝ジローを中心に数名の協力者が行った、前述したセミナーの結果を出版したものである。それらの原稿は、フランスの出版事情が危機的な様相を呈しているために、時期も遅れかつ思い切った縮減が行われて、出版された。労働組合運動史センター CHS 及びモーリス＝トレーズ研究所 l'Institut Maurice Thorez IMT に提出されたこれらの文献は、モーリス＝トレーズ研究所で複写したり、また注文したりする

ことができる。[9] ところで、特筆すべきこととして、極く最近になって、モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所所蔵の文書が、マイクロフィルムの形でモーリス＝トレーズ研究所に返還されてきており、目下同研究所でそれを整理中であるという事実が明らかにされている。筆者はまだ、その資料を活字体としては未見であり、従ってその詳細については知り得ていないが、かなり重要なフランス関係のコミンテルン資料等がそこに埋蔵されていると推測することができる。[10]

因に、『歴史学雑誌』Revue historique が、毎年学生たちの論文（高等研究課程修了証論文や修士号論文）のリストを公表することを中止してから、どの機関誌もその研究動向を発表していない。ただ、数年来、『フランス政治学雑誌』Revue française de Science politique が、発表された論文の不完全だが有用なリストを示しているだけである。

J＝ジローは、かなり多くの地方大学の何人かの研究者や教官の助けを借りて、県ごとのこの文献を作成した。しかし、幾つかの大学センターが、この調査に応じなかったし、あるいは不十分にしか応じなかった。この文献は、三つの見出しの下でさらに幾つかの分類を含んでいる。すなわち、共産党（通史、文献、伝記、回想）、労働運動（通史、文献、伝記）及び一般研究（経済、社会、政治、その他）が、その内容となっている。この文献は、直接地理に関する論題を含んでいないが、若干の論文が、その主題に特別の関心を払っている。そして、これらの文献は、近々定期的に発表される予定になっている。モーリス＝トレーズ研究所（パリ七五〇一三、オーギュスト＝ブランキー大通り六十四番地）が、自由に種々の相談に応じている。[11]

J＝ジローは、編著のはしがき「両大戦間におけるフランス共産党の定着の問題点のために」の中で、大要次のように述べている。この研究は、一九三九年で止まっている。歴史家は、現在の中に過去の説明の鍵を発見できる。われわれは、他の学問分野の研究者たち（社会学者、政治学者、人種学者、言語学者等）との接触を増幅し、かつわれわれの個人的もしくは集団的な経験を顧慮しつつ共産党史に貢献しようと考えた。全国レヴェルにおける政治諸勢力の研究は、全国政治学協会 la Fondation nationale des sciences politiques の主導の下で実施されてきている。労働者階級及び共産党

に限定すれば、J＝ランジェ J. Ranger、F＝ボン F. Bon、R＝ムーリオー R. Mouriaux、P＝ガボリ P. Gaborit らの労作が注目される。党の「政策」や「イデオロギー」の研究も行われている。例えば、J－B＝マルセールジィ J.-B. Marcellesi の社会言語学的アプローチが注目される。そのさい、研究の中立性、知識の客観性及び歴史家の聡明さが要求される。われわれは、現実に背を向ける歴史を批判し、専攻論文的な歴史、人類の歴史並びに総括的な歴史を擁護する。共産党のような政党は、新しいアプローチを必要とする。われわれは、党を「反社会的な党」《Parti-contre société》あるいは「一枚岩的な党」《Parti-monolithe》とする仮説を拒否する。共産党は、フランスの「現実」の所産であり、フランス及び世界における生産諸関係の発展における一モメントであり、一動力である。また、共産党は、フランスの外部全体、すなわち、コミンテルンの所産でもある。われわれは、とくにフランスの生活に及ぶ国際政策の結果を把握しようと考える。両大戦間においてコミュニストになることは、とりわけソ連邦と連帯することであった。ところで、ソヴェトの現実とコミンテルンの現実は、フランスのコミュニストには余り良く知られていなかった。われわれは、コミンテルンの役割に過大な意義を付与する古典的な史料編集に抵抗しようと考える。[12] 例えば、一九二一－一九二四年の統一戦線の問題は、フランス共産党史の立場から見れば、フランスの現実から出発して初めて理解することができ、さらに、コミンテルンの定義に成る新しい戦略の深い動機付けをよりよく理解することができる。周知のように、フランス党は、この戦略に抵抗した。そこに、当時共産党内に残溜していた古い社会民主主義の基調や革命的サンディカリズムの潮流を読み取ることができた。定着の研究は、具体的情勢の把握と党発展の成否の説明を可能にし、また、色々な構造上の条件下における、「大衆の中へ」をスローガンとする党の成功もしくは党の運動の失敗の探究を可能にする。「最下部レヴェルでの」この研究は、党政策の伝播、党選挙民の動機付け、党指導部の認識方法等の理解を助け、また、定着の過程及び政治的テーマの選択、簡単にいえば、定着させる機関と定着させられる団体との相互作用、社会構造と精神構造の照応関係のより深い分析を助ける。情勢の「客観的」な側面だけで満足してはならず、党組織の意義や多様性をよりよく理解するには、幾

つかの特殊性をも完全に認識する必要がある。定着の研究は、例えば一九二八－一九三二年の時期のような党史の一定の混乱した時期を理解する手段の一つである。われわれは、「定着」という言葉に最も広い概念を与える。組織と環境との出合いがどのようにして形成されるか、それはどのような出合いか、組織と環境との間に浸透、同化、反射もしくは相互影響があるのかどうか、これらのことを検証して見る必要がある。定着の研究を権威付けるためには、一時的に党に関する政治史の伝統的な幾つかの仮説を拒否して見る必要がある。そのためには、党を環境の中に深く統合して考えて見なくてはならないであろう。現代史は、他の人間諸科学の新しい方法を存分に援用する必要がある。こうした研究の拡充は、定着の概念が曖昧なために必要とされる。歴史家は、古典的な方法では、党組織と選挙の影響しか分析できない。しかも、共産党にとってアルザスの場合が証明しているように、定着は持続的な影響力と同義語ではない。逆に、弱い党でも影響力を持ち得る。

この編著は、J＝ドローズ教授の主宰下で、パリ第一大学労働運動史研究所の枠内で行われた研究活動の幾つかの成果を収めている。この研究セミナーは、一九七〇年以降、他の大学、他の専門分野の多くの学生や同僚を結集して行われた。資料は、必ずしも十分に利用できない状況にある。公文書公開の規制も徐々に緩められてはいるが、研究の一般的方向付けに不利な不規則さがまだ数多く残されている。前記したように、コミンテルン－フランス文書がフランスのモーリス＝トレーズ研究所へマイクロフィルムの形で返還されてきたことは、今後の研究に新しい展望を開くものと考えてよいであろう。[13] この編著はまた、モーリス＝トレーズ研究所の枠内で行われている、フランス共産党史について進行中の共同研究の一資料でもある。この編著は、後述するように、幾つかの精選された論稿を収めている。

第一の論稿は、J＝ジローの筆に成る「両大戦間におけるフランス共産党　幾つかの指標」である。そこでは先ず、選挙によるアプローチという指標が挙げられる。選挙の研究は、党定着の一定の形態を検討する一手段である。ただし、フランスにおける共産党の定着を選挙

の結果だけに縮小し、共産党と選挙民の関係しか説明しないのは大きな誤りである。一九三〇年代当初の戦略論議は、農民と「階級対階級」戦術の敵対者との間に対立を招来したが、この論議はより広範な問題を内に含んでいた。すなわち、議会主義という特徴を持つ実践が、大衆との新しい関係、日常闘争の政治化や主に工場内での大衆との関係に替えられ、選挙の側面はそれだけ後景に退く結果を招いた。(14) 第三共和制下では、市町村選挙、郡選挙及び立法選挙の各レヴェルで、選挙民と共産党との関係を検証する必要がある。共産党は、先ず市町村レヴェルの選挙で成功を収めていった。共産党選挙民の中核組織が、どのように形成されたかが問われねばならない。投票の連続性及び非連続性の検討も、主要な問題である。一九二〇年代及び一九三〇年代の立法選挙における共産党関係の一般的推移は、上掲表の通りであった。共産党にとっては、一九二八年以降の郡選挙の結果が重要であった。組織、党員及び行動の側面と客観的な要因（選挙民の社会職業構成、全国及び地方の政治経済状況、社会党SFIOの能力）とを綜合して判断しなければならない。一九二四年以降、共産党の進出した地区では、社会構造の影響力、都市人口の増大や工業中心地の比重等が注目される。一九二八年から選挙規定が変更となり、郡投票制に個人的な要因が加味された。一九二八年後、党勢が拡充した地域では、よりよき定着と適確な反社会党的闘争の成果が見られる。とくに、補欠選挙の第二回投票で顕著なように、組織定着の弱い地域は、社会職業構成の特徴や農村地帯という傾向を持つ。他方、第二回投票で党勢を維持もしくは拡充できた地域では、組織の根の張り方の強さ、反社会党的闘争の鋭さ、社会党の弱さ及び当該地域の労働者の特質等が識別できる。一九三二年選挙での党勢の後退は、当時共産党が最悪の時期に際会していたために起こった。すなわち、党の内部危機、党議員の分裂及び脱党、経済恐慌の開始、弾圧、ストライキの政治化という戦術の終末が、党員活動の不十分さ及び党組織の弱さと相乗作用を起こしていた。周知のように、一九三六年選挙では、北部フランス、パリ地区、中央山岳地帯沿岸及び南部で党の進出が著しかったが、それには、一九三四年以降の決定的な変化、すなわち、行動統一協定の締結、郡選挙の勝利、市町村選挙での最良の成果並びに社会党分裂の結果が作用していた。その後の補欠選挙で、工業地帯及び農業地帯でともに後退が見られたが、それには、党定着の弱さと統一への潮流の凋落とが微妙に反映していた。次いで、J＝

年　次	得　票　数	選挙登録者に対する%	議員数
1924	875 812	7.9	26
1928	1 063 943	9.3	14
1932	794 883	6.8	12
1936	1 487 336	12.6	72

ジローは、定着させる組織についての指標を挙げる。共産党全史が、とりわけ「大衆」と党政策との関係を探究することを目標にしている。党員の動きについては、A＝クリージェルの分析が参考となるが[15]、それには、二つの反省が必要である。一つは、その動きと党の政治的意図との相関関係を見究めることであり、例えば党政策による打撃や分派再組織の結果等が、その動きに与える影響を考慮せねばならない。他は、その動きと選挙での勝利の役割、とりわけ連合の役割との相互関連を見定めることであり、端的にいって、組織と選挙との関係を逐一洗っていく必要がある。中央集権的な党たる共産党にとって、組織問題は極めて重要な問題であり、とくに「新しい型」の党を目指し、かつ議会万能性を否定する党にとって、工業中心地における工場細胞作り、いわゆる組織の「ボルシェヴィキ化」が永く至上命題とされていた。J＝ジローは、幾つものサンプルを呈示しているが、例えば、一九二五－一九二八年の情勢の部分的なアプローチは、現在国家文書F[7]シリーズの若干の資料やコミンテルン本部内フランス支部宛ての報告資料（モーリス＝トレーズ研究所所管のマイクロフィルム）で追跡することが可能となっている。[16]党の「分権化」は、ようやく一九三〇年代の初めから指向されるようになった。次に、J＝ジローは、グローバルなアプローチに向けてという指標を挙げる。両大戦間における共産党の定着の強固な地点は、トゥール大会時の党員の状況、一九二四年までの発展、第二次大戦までの立法選挙の結果、党員の細胞の発展、社会党の影響力並びに県連の党員等のデーターを基に、それぞれの地方全体を微細に検討する必要がある。とくに、県レヴェルでの定着の研究は、選挙、党員、細胞数及び出版物発行等の状況を基に解明することができる。セーヌ県、セーヌ－エ－オアーズ県等定着の良い県、[17]社会党の強い県等々を説明するさい、議員の役割、市町村の役割、社会職業的説明、政治的説明、さらに社会党的潮流の消長等を基に分析する必要がある。共産党の定着の諸形態に係る類型学は、全国的レヴェルで一律に描き出すことはできない。フランスの構造、とくに経済的、社会的、人口的、文化的及び政治的構造が、この研究に強い羈絆性を持つことはいうまでもないが、その影響力には自づと差異性のあることは論を俟たない。構造的諸要因とより主体的な諸要因、例えば組織力は、同じ方向で作動しない。過度の体系化は、フランス共産主義の不動の一枚岩的イメージを印象付けることにしかならないし、その失敗や成功を政治的に説明することにしかならない。フランスの場合、さらに、宗教的知識と環境の解明が必須である。宗教的諸要因と労働者階級については、社会学の分野で一定の研究蓄積がなされている。[18]このグローバルなアプローチという指標は、さらに幾つかの命題で論及されている。先ず最初に、一九一四－一九一八年戦争の幾つかの経済的社会的結果が述べられている。共産党の

誕生は、第一次大戦中の労働運動の戦略的失敗に起因している。大戦の直接の結果は、まだ良く知悉されていない部分が多いが、党の定着がそれに依存していることは事実である。ノール県、パードゥーカレ県、パリ地区等や農村地帯を具さに検討すれば、そのことが明らかとなる。戦争の多義的な結果、とくに経済ー社会関係や人口等の標識がとりわけ重要である。政治的には、左翼ブロックの動向が注目されるが、共産党はそこで反戦闘争を貫き、また一貫して和解政策に反対した。次に、一九三〇年代の経済恐慌と共産党の定着という命題が述べられる。フランスの産業は、全国で同一の発展段階にないため、恐慌の影響も部門ごと及び地方ごとで異なっている。J＝ジローは、各地の実態を描出したあと、経済恐慌が共産党の分析の浸透を助けたことを認めたが、そこからストレートに党の定着が有利であったと結論付けることをためらっている。恐慌と定着の関係は、さほど機械的ではない。労働界では、闘争への参加と党への完全な加盟とを分かつ距離が大きい。雇用不安の問題、生活水準の維持、弾圧への恐怖等が、党定着にとって一定の抑止作用を演じる。次に、人口発展の幾つかの側面について論及が行われている。すなわち、都市人口の増加と、その大部分を吸収するパリ地区の動向、それと引き換えに農村人口の流出、とくに移住や鉄道網の関係等が、党定着とどう関連するかという実態が描かれている。とくに、農村地帯では、フランスの西部、南西部及びブルゴーニュ地方での党定着率の高さが検証されている。続いて、農民層の中での共産党という視角が述べられている。農民の政治生活への参加、とくにその理由や方法、さらに農村の社会ー経済条件が、共産党の定着にとっての決め手となる。もちろん、フランス農村も地域的発展の差異は免れず、農村の社会関係の役割やそれと党定着の関連が重視される必要がある。J＝ジローは、フランスの各地方、とりわけ南東部、西部並びに南西部地方の特徴について論及し、農業構造が相対的に安定している所では、共産党がなかなか浸透しにくいことを立証している。ところで、持続的な農村人口の流出、農村における教師集団の役割及び農村における伝統といった指標の下で、その構造の変貌がやがて見え始めてくる。ところで、共産党は、ソヴェトの経験や党の農業政策を常時参考とし、フランス農村の社会諸関係分析の鋭い意思を持ち続けると同時に、とりわけ党の深い定着と選挙における影響力との関係を緊密化する発想を持ち続けた。農村における色々な政治行動が、共産党の持続的な定着を結果する。いわゆる政治問題の契機が、党定着にとって重要な意味を持ち、他方経済問題や農民組織の契機では、党はさほど成功例を有していない。共産党の農村への浸透には、はっきりした階級的性格が要求される。一九三〇年代には、恐慌の役割とともに党指導者個人の役割も重要視される。さて、フランス共産党の発生及び発展のさい、農民層は特別

の役割を果たした。A＝クリージェルの部厚い博士論文が明示するように、一九二〇年のトゥール大会で、第三インターナショナル加盟派が相当の農村地方に拡がっていた。そもそも、共産党は、農民と労働者の出合いから誕生した。その後、社会主義運動への一定の農民層のより大きな浸透性、農村でのやや安定した状況、さらに共産党の「労働者主義的な」《ouvriéristes》屈折等があって、党の定着に一定の弱体化の徴候が見られた。また、他の幾つかの形態による党定着の維持も図られた。[19] このように、共産党史は、党の農業政策、組織構造並びに党員の発展の中で探究すべき多くの課題を抱えているといえよう。さらに、労働者階級についての視角が論じられている。いうまでもなく、両大戦間期において、工業フランス（とくに、北部及び北東部）で構造上の変化が見られた。代表的な産業として、冶金、建築及び化学工業が挙げられる。共産党定着の重要なファクターは、これらの工業部門の中にあり、単純化していえば、共産党は、冶金工業労働者の党と形容することができた。[20] この間、労働者は、大規模な技術革新の洗礼を受け、多数の専門労働者OSが輩出した。ところで、その場合の政治的な変化は、必ずしも党定着と照応しなかった。共産党の定着に著しく適した職業は、鉄道労働者層の中に見い出すことができた。[21] 新産業（電気冶金や石油精製）が出現し、かつ集中現象が現出した。ところで、共産党の最優先目標は、ボルシェヴィキ革命の擁護におかれており、フランスの社会経済状況を直接把握するという態度がやや希薄であった。[22] 党は、労働組合運動を媒介として労働者に知られるという状況があった。この意味で、統一労働総同盟は、いわば党の伝導ベルトとしての外観を保持していた。労働界において、その構造と定着させる側の組織との出合いの条件を吟味する必要がある。ボルシェヴィキ化の過程にあった共産党は、何よりも先ず労働者階級の中に深く投錨する必要があった。J＝ジローは、幾つかのサンプルを呈示する。また、外国からの移住労働者やその役割も重要であった。党内でイタリア人やポーランド人の果たした役割は大きい。労働者の住宅事情も、党定着のさいに考慮すべきファクターの一つであった。さらに、イヴリー市の例が示すように、労働者の存在とその選挙行動の関係も重要であった。ところで、労働者階級の存在と党定着の関係は、労働界でさまざまな抵抗を生む。共産党と労働者の行動に関する数多くの調査は、ケース－バイ－ケースで具さに検証して見なければならないであろう。最後に、労働及び社会主義運動の中での共産主義という視角が論じられている。共産党定着の研究は、労働運動全体、その力、その弱点及びその伝統の研究から孤立させてはならない。J＝ジローは、一九二〇－一九三六年を例にとり、労働組合やストライキの素材を中心に述べ、とりわけ労働者闘争やとくにイデオロギー闘争が党の強化に結びついたこと、また、統一戦線や社会党との競合関

係を「赤いヴァール県」を例にとって述べ、行動統一や人民連合のさいの数例について述べている。総じて、労働運動内部の勢力状態が、党の定着に重要な役割を果たす点を強調し、その指標として、住民の希望、労働者階級の状態、社会主義の力及びコミンテルン戦略の力を挙げる。戦術と地方情勢の違いによって、定着の分布図も異なる。「統一戦線」路線、ボルシェヴィキ化及び人民戦線のさいの統一政策への抵抗や、アルザスに見られた自治権的潮流との妥協、「階級対階級」戦術への反対、「右派的分析」の発展及び分派組織の力と結果は、違った党定着の態様を生んだ。[23] フランスにおける共産党の定着の研究は、党及びコミンテルン政策の研究と不可分である。全国的ヴィジョンはいうまでもなく、地域的コンテキストを重視する必要がある。ところで、党定着は、党認識の一要素に過ぎない。それは、党政策と環境との出合い、党の影響力、出版物の普及、組合員大衆及び大衆組織と党組織それ自体との関係を解明する一つの導きの糸を提供するであろう。

第二の論稿は、J＝ジローの筆に成る「パリ地区における共産党の定着」という論文である。[24] J＝ジローは、この論稿をまとめるに当って、国家文書F[7]シリーズ、警視庁文書Aシリーズ、それにセミナリアンたちの主としてパリ第一大学へ提出した各種修士号論文、博士論文等を数多く引証している。先ず、一般的枠組が設定され、最初のアプローチとして選挙と党員数の問題が、一九二四－一九三六年の期間について述べられている。これらの問題が、党組織の問題ひいては党定着の問題に連なる。そのさい、前出したA＝クリージェルの労作が活用されている。例えば、一九三〇年に党の影響力と党員数の弱さとの不一致が見られるのは、党政治局がサン－ドゥニ大会後の「地区のプロレタリア下部組織の政治的反動」や地区指導部の「日和見主義的」及び「左翼主義的」実践を抑止したためであった。[25] 党定着や党影響力の問題では、とくに政治的分析を優先させなければならない。パリの枠組での大きな条件としては、工業の集中化、恐慌及び合理化並びに賃銀の低下等に伴う住民の変動、選挙上の成功、共産党の定着、失業の密度並びに恐慌時の利害得失等を伴う工業化の実態、住宅問題に代表される生活諸条件の問題、それに定着させる側の組織の問題が解明されるべきであろう。次に、パリは特別の問題を抱えているかという設問の下で、住民の変動、登録有権者全体の変動、社会職業的現象並びに労働界の変容等の人口問題に関して、貧困や住宅事情等のパリでの生活の枠組について、さらに伝統と党の政治的実践並びに党それ自身の問題点についての論述が進められている。続いて郊外における幾つかの特別の問題と共産党の定着に対するそれらの結果が検証されている。郊外の増大が、党の政治行動や運輸問題、それに一九一九年制定の八時間労働制とどう関連しているか、そのさい一定の図式主義的理解は避けなければならないという点や「赤い郊外」、とくにパリ西部地区（とりわけ企業内）やイヴリー市に代表されるパリ南部等を例証に挙げて、郊外の神話と現実とが検証されている。さらに、

そこでの生活の枠組、立法過程を含む区画整理の問題、低廉住宅 HBM を中心とした共同住宅の問題、郊外コンミューンにおける幾つかの変容の問題が述べられ、次いでそこでの政治生活における伝統と断絶の問題が論及される。社会党市政や共産党分派組織との脈絡等が指摘され、共産党の最良の定着を問題にする場合には、「強情な社会民主主義者」といった単純な表現や、党戦略と「階級対階級」戦術の対立を超えた理由が存在した点が強調されなければならない。[26] また、ドリオ問題の投げかけた波紋について、一九三二年頃決定された、党組織のパリ地区における分権化が、M＝トレーズにとって、サン＝ドゥニの議員（J＝ドリオ）の影響力を除去する狙いを持っていたと評価する、A＝クリージェルの論点が反証されている。[27] 最後に、共産党市政については、前出したコミンテルン＝フランス支部のマイクロフィルムが、多くの問題を呈示している点を明らかにし、さらに中産階級やとくにカトリック教徒との関連が注視されている。

第三の論稿は、P＝プラニャール Pascal Plagnard の筆に成る「パリ第十三区におけるフランス共産党の定着」という論文である。[28] この論文は、前出したP＝プラニャールの修士号論文（パリ第一大学提出）と関連性を持っている。ただ、この論稿執筆のさい未公開だった国家文書や警視庁文書の類いは引証されていない。主に、党公開文書や生きた証言等が活用されている。この論稿では、共産主義の定着ではなく、共産党の定着、それも生きた党の政策及びそれを実践する人間集団に重きが置かれ、「定着し」又は「定着させる」諸人間の歴史が指向されている。しかも、フランスの経済的政治的レヴェルにおいて決定的な時期でかつ区制が施かれた一八七〇年から一九三九年までの長い期間が、研究の射程に入れられ、第十三区の住民の発展とその行動様式がフォローされている。先ず、二つの「民衆的なパリ」という柱が立てられ、住民の増加、とくに移住者の増加によって、第十三区の北部と南部に一定の差異が生まれる。ダイナミックな一つのパリは、第二十区のように主としてノール県からの移住者を抱える工業的伝統の古い組織を持つパリであり、もう一つは、第十三区を含めて伝統と農村的要素（とくに、第十三区南部の周辺街は、ブルターニュ県、リモージュ県、トゥールーズ地方からの移住者が圧倒的に多数を占めた）を持つ民衆的なパリとして描かれている。次に、工業化の諸局面という柱が立てられ、第十三区には、一八八〇年から金属、建築、衣服、皮革それに食糧各産業が起こり、職人層や下層階級が形成された。本格的な工業化は、一九二七年から始まり、冶金（自動車）及び食糧（砂糖）産業が、その代表的な例であった。一方、一九一四年から第三次産業の発展が見られた。総じて、第十三区の北部は、大工業労働者及び第三次産業で特徴付けられ、同南部は、冶金産業及びサラリーマン層で特徴付けられた。第一次大戦前、この街には、労働者としての伝統を持たない住民、すなわち、工業化局面で重要な役割を荷なった農村地方からの移住民や下層階級の存在が目立ち、一方、

一九一八年から顕著な第三次産業部門への移行局面においては、生っ粋の労働者住民の退潮が見られた。ただ、ガール la Gare 街だけは、例外であった。さらに、社会主義及び共産主義の発展という柱が立てられ、選挙問題を中心に論述が進められている。二十世紀初頭と一九三〇年代の二回にわたって、大きな画期が描かれる。その間、社会主義と共産主義との間には、断絶の面と連続の面とがあった。住民の発展や第三次産業の発展により様相がかなり変化したが、共産主義はおしなべて一九一四年以前のフランス社会主義と正統な連続を成すものと考えてよい。社会主義の定着について、第十三区の北部たる中心街は、概ね古い社会改良主義が優勢であり、南部たる周辺部は、戦闘的な社会主義が支配的であった。しかも、時代とともに、重心が北部から南部へと移動していった。一九二〇年の共産党の出現は、当該区の労働運動の発展に三つの結果をもたらした。一九一四年以前の「左派」社会党は、周辺街に定着し、中心街の「右派」社会党は、離脱現象を起こし、一九三六年の人民戦線期には、両者とも政治勢力としては消滅してしまった。[29] P＝プラニャールは、幾つかの例証を挙げて説明を加える。一九二八年以降、得票数の減退等党の停滞が見られる一方、党員数等党の政治的進展が見られた。党定着は、必ずしも選挙上の資料だけで判断すべきではない。最後に、一九二〇年以降の共産党という柱が立てられ、党政策を中心に論述が進められている。一九一四年前の社会党と一九二〇年後の共産党の間に、定着上の大きな変化はない。一九二一－一九二九年の動向は、公的資料が未公開なので詳らかにできない。共産党セーヌ県連盟（大会）での財政報告や組織報告によると、党の転換の年が一九三一年であることが判る。一九三二年は、選挙での敗退が記録されているが、一方党加盟者の増大が見られる。党は、党員募集に徹し、党政策の浸透と党組織の拡充に努力する。党は、「小商人」や「官吏」にも視野を拡げ、大衆政党を目指した。一九三一－一九三六年にかけ、地方党新聞『バリケード』La Barricade（やがて『第十三区の生活』La vie du XIIIe に改称）紙、党幹部それに党機関の整備が進む。主として、企業と地方に依拠する細胞が、住民の直接要求を基盤に党勢拡大に努力する。この間、党の得票率は停滞し、党機関紙等もさほど拡大していないが、党の大衆組織は、大企業労働者を中心に着実な伸びを示した。前記したガール街だけは、いわばゲットー的状態を示したが、総じて党及びシンパサイザーの社会学的構成と第十三区住民のそれとのずれは大きく、とくに一九三六年の人民連合の現実の姿が、その明証であった。労働運動の定着と住民の発展との間の生理的配列の問題が、そこでの重要な課題であった。

第四の論稿は、B＝シャンバ Bernard Chambaz の筆に成る「イヴリーにおけるフランス共産党の定着」という論文である。[30] この論

文は、前出したリスト中にあるB＝シャンバのパリ第一大学に提出した修士号論文に依拠して書かれたものである。この論文では、労働者都市イヴリーの相貌が、社会的、経済的及び政治的に描かれている。先ず、党定着の客観的諸条件という柱が立てられ、企業、住民及び社会職業的分布の概観が論述されている。企業は、一八四八年以前から芽生え、第一次大戦直後にはほぼ完備した。冶金、化学及び食糧産業が主たる企業で、一九一九年以降は、大幅な模様替え以外に新しい産業の定着は極く稀であった。住民は、一八四〇－一九三一年の間は規則的に増大したが、一九三一年以降は、恐慌や都市流出の要因もあって減退し始めた。セーヌ県出身者が三分の一を占め、後の大半が地方からの出身者で占められた。若い住民層の比重が高く、人口の半数が低廉住宅に住む勤労者層であった。社会職業的分布の検討は、イヴリーの選挙住民の分布と労働者の「定着」との関係や、この労働者の「定着」と選挙の影響及び共産党の組織とイデオロギーの定着との関係を確定するのに役立った。総じて、イヴリー市では、労働者的サラリーマン層が五〇％以上（その内冶金労働者が二〇％以上、建築、運輸等専門労働者が一〇％）、非サラリーマン層が二〇％近く（商人層がその半分）、そして事務所、商業使用人や官吏等非労働者的サラリーマン層が約二〇％を占め、工業家等はわずか一％であった。一九二〇年から一九三〇年にかけて、この分布図に変化が生まれ、労働者的サラリーマン層が増加し、非サラリーマン層と非労働者的サラリーマン層が市中心部でそれぞれ減少した。とくに、冶金労働者は確実に増加したが、専門労働者は多少減少した。一九三六年に、これら勤労者層は、市住民の六五％以上を占め、全国平均を約一〇％上回っていた。イヴリー市では、労働者の「定着」が極めて強力であり、従ってその社会的インパクトもまた磁力が強かった。サラリーマン全体が、市選挙住民の約八〇％を占め、共産党の影響力や定着の進行も著しかった。イヴリー市は、イヴリー中心街 Ivry-Centre、小イヴリー街 Petit-Ivry、イヴリー港街 Ivry-Port の三区画でそれぞれニュアンスのちがいはあったが、工業都市、青年都市、労働者都市それにオリジナルな都市という特徴を持つユニークな都市であった。次に、フランス共産党の定着という柱が立てられ、論述が進められている。イヴリーにおける一九一四年までの社会主義の勢力は、第二帝政末期から発芽し、パリ－コンミューンの経験を濾過して、フランス労働党ＰＯＦ、フランス社会党から統一社会党ＰＳＵへと発展した。こうしたイヴリーの労働者及び社会主義運動の輝く伝統は、共産党の政策に深く浸透した。立法、市及び郡の各級選挙でも、党の影響力は増大の一途を辿った。一九二四年の立法選挙以降、共産党は常時三分の一以上の得票数を確保し続けた。一九二八年の立法選挙では、社会党への票が共産党側に大きく流れた。一九三六年の立法選挙で、共産党は、

名実ともにイヴリーにおける政治活動の支配勢力たる地位を獲得した。この選挙で、共産党の得票は、全国平均三〇％を上回り、とくに小イヴリー街とイヴリー港街での得票が際立っていた。一方、共産党組織の定着について見ると、コミンテルン第五回大会で徳通された企業細胞の創設は、フランスの労働者郊外における平均をはるかに上回っていた。一九三〇年初めからは、地方細胞の創設が着手され、一九三二年末の改革によって新しい地区細胞への衣替えが実行された。ところで、細胞作りはその後、一九三五年まで一時停滞したが、一九三六年の人民戦線のピーク時には、細胞数も党員数もそれこそ爆発的な拡充を示した。党の企業内での定着は、全国平均を上回り、とくに地方細胞の割合がとみに増大した。一九三八年以降、党は、労働者層だけでなく非労働者層にもその支持基盤を著しく拡張した。最後に、党定着の説明の仕方が論述されている。先ず、市政の影響力と活動について説明が行われる。イヴリーの共産党市政では、とくに児童政策と社会政策（住宅、衛生及び健康管理）に重点が置かれ、かつ国家独占資本主義に対する市固有の防衛策が講じられ、住民各層の生活が庇護された。失業は、一九二六年十二月から一九三六年末まで持続し、また、恐慌は、中小商業部門を中心とした中産階級にも打撃を与えた。イヴリー市では、資本からの徴税が徹底し、イヴリー市でだけ賃貸価格による工業及び商業事務所への課税が実施され、他方、夏季の観劇で地方税を徴収しない等の措置が講じられた。市職員や教員等の賃銀の減額や既得権の縮小は、最小限度に抑えられ、失業者には、一定の財政補助が付与された。資本からの徴税の財源を基にして、民衆スープ店、学校無料食品売店が開設され、また、児童への夏服支給、児童無料医療診察、それに牛乳支給が実施された。こうした実績を基に、党の選挙における影響力が増幅されると同時に、党それ自体の発展が定礎された。共産党は、社会党や右翼を尻目に、住民大多数の利害の代表者として、市の特別のグローバルな活動に関与した。党は、恐慌の犠牲者に与える支持によって極めて特徴的な活動を展開し、また、「恐慌の責任者」に対する適切なキャンペーンを実行し、選挙綱領においては、イヴリーの現実に即して採られる多岐にわたる創造的活動を尊重することによって、一定の堅固な地盤を確保していった。次いで、地区 rayon 組織の影響力と活動について説明が行われる。共産党誕生の時点から暫くの間は、地区の力は極めて弱かったが、地区組織は、一九二五年のモロッコ戦争反対運動、一九二六－一九三二年初めの失業者委員会、さらにソ同盟防衛委員会等の活動を通じて、徐々にその力を蓄えていった。この間、組織に対する弾圧は苛烈であった。イヴリー地区組織では、「バルベ－セロール＝グループ」の反響は、極めて小さかった。イヴリー住民の政治意識の一端を、そこに読み取ることができた。しかし、一九三二年までは、社会党支部と共産

党地区との間で、統一戦線問題についての接触は何らなされていない。一九三三年に、アムステルダム－プレイエル委員会を支持する六つの地方委員会が創設された。一九三四年の二－六事件後、反ファッショ監視闘争委員会や青年委員会が設立され、一九三五年十月には、四十二の組織が参加する人民戦線委員会が結成された。[31] これらの組織には、多くの民衆の参加が見られたが、しかしまだ、そこで独自に活動し、かつ自主的なイニシアティヴを発揚する力は、十分に持ち合わせていなかった。一九三三年から一九三五年まで、「火の十字架団」を中心とするファシストのデモが、企業内でしばしば起こった。反ファシスト組織も、これに即応して、一九三九年まで果敢な反戦反ファシズム活動を企業内部を中心に展開した。その間、共和国スペインとの連帯活動が活発に展開され、イヴリー住民は、積極的に国際旅団志願兵としてスペインの地に赴き、他方スペインからの数百名に上る避難民を幾つかの休暇村に収容して保護した。アムステルダム－プレイエル地方委員会を媒体として、社共両党支部の接近が図られ、統一への流れが一段と強力となっていった。人民戦線委員会が、街や工場の要所要所に作られたが、しかし大衆との連繋という点ではまだまだ不十分さを残していた。さらに、カトリック教徒へ手が差し延べられた。労働者都市イヴリー、オリジナルなイヴリーの経験は、極めて特異性に富むケースを代表していた。

第五の論稿は、A＝フルコー Annie Fourcaut の筆に成る「低廉住宅集団における共産党の定着、バニュー Bagneux 市の鳥キャンプ都市（一九三二－一九三五年）」という論文である。[32] この論文も、A＝フルコーがパリ第一大学に提出した修士号論文に依拠して書かれている。この論稿は、地方共産党新聞（『新しい夜明け』 l'Aube nouvelle 紙）、主としてバニュー市文書館に所蔵されている三巻の資料や四十号の通信、それに住民や共産党員らの口述証拠等を活用して編まれている。この論文は、二千数百人の低廉住宅都市をサンプルにして共産党の定着問題をフォローしたユニークな内容を持っている。先ず、バニュー市及び鳥キャンプ都市の概観が述べられている。バニュー市は、以前は完全な田園都市で、少数の企業しか有していなかった。一九二一年から、区画地の増殖に伴って、その大多数がサラリーマン層である住民が増え始めた。一九一四年までは、社会党の伝統が見られたが、一九二〇年以降、区画地住民の半数以上が、社共両党の支持者と見られるようになった。一九二〇－一九三二年の共産党の定着については、資料の欠如もあって不明な点が多いが、共産党員は四十人近くでその大多数が四十歳以下であり、そのほとんどが社会党か在郷軍人共和連盟 ARAC の出身者で、階級対階級戦術に基づく運動を展開していた。しかし、共産党はまだ、地方の直接諸要求の掘り起こしが十分でなく、市の可能な管理者として住民に映って

いなかった。一九二九年、SAZ協会（後にパックス Pax 協会）が、バニュー市北部に鳥キャンプの建設に着手した。一九三六年の調査では、このキャンプ都市の住民は、二、二九七名（七九一家族、一家族平均二・九人）、その中五六・七％が地方の出身者、四〇・五％がパリ及びセーヌ県の出身者で、二・七％が外国生まれの者であった。鉄道、パリ地区共同運輸会社 STCRP、商店及び銀行等に働く労働者的サラリーマン層が、その圧倒的多数を占め、この低廉住宅都市の借家人たちであった。いわゆるパリの「ベッド＝タウン」たるこのキャンプ都市のサラリーマン層は、七・二％がバニュー市、五八％がパリ、そして一九％がパリ郊外で労働する夫婦共働きの若いカップルか結婚前のカップルがほとんどであった。一九三二－一九三四年、学校、商店等環境整備は極めて不十分で、かつ住宅条件そのものも極めて劣悪な状態であった。物価も常時、一〇％高であった。次に、鳥キャンプ都市における共産主義の定着という柱が立てられ、論述が進められている。この定着は、数々の複雑な困難を伴ったが、アプリオリに要求運動の発展に有利な環境の下で進行した。一九三四－一九三五年、経済恐慌と失業のインパクトが、コミンテルン及びフランス共産党に戦略転換を強いた。一九三五年以降、共産党によるバニュー市政の操縦は、借家人友愛会 l'Amicale des locataires の組織を通じて定着していった。一九三二年九月、友愛会はまだ、政治的無関心の態度を示していたが、一九三三年四月、共産党の指導の下で、パリ地区借家人連盟に加入して以来、市内でそれこそ息の長い、かつ大規模な要求活動を展開した。ただ、一九三三年四月－一九三四年十月、友愛会は、具体的な政策手段で一定のためらいを見せ、とくに階級対階級戦術のイデオロギーを地のままで適用し、言葉の威圧等を濫用する傾向が強かった。一九三四年十月以降、友愛会は、新しい活動手段に方針を転換し、パックス協会に対する家賃スト、暖房設備を要求するデモ、道路修理を要求する集会等を頻繁に展開する。人民戦線の集会は、これら借家人たちによってアクティヴに支持された。社共両党支部のスクラムは、極めて強靱であった。一九三五年八月から、家賃が二〇％減額され、暖房費の調整が行われた。一九三六年以降、一年半にわたって、辛抱強い各種の組織活動（例えば、お祭り、ダンス、野外遠足、図書館建設、芸術音楽サークル作り、各種デモ等）が果敢に展開され、この都市は、パリの「赤い郊外」のユニークな一つの小さな街として成長していった。最後に、鳥キャンプ都市における人民戦線という柱が論及されている。人民戦線期に、友愛会（メンバーは四五〇名）の活動が完全に開花した。一九三五年の市選挙では、赤い候補者への投票が行われ、これらの議員によって、今まで市政で不可能とされていた諸問題が次々と解決されていった。労働者都市となったバニュー市は、共産党市長の下で近代的な方法により管理され始め

た。家賃問題を初めとして、多義的な要求行動が展開された。一九三五年五月に実施された市選挙で、その第二回投票のさい、社共両党支部は、友愛会を含めて、「反ファシスト、労働者統一」の合同名簿を作り、一、三六〇票、四三・七％の得票を得て、共産党市長を誕生させた。市の有権者たちは、急進党所属のT＝ティシェ T. Tissier 市長による無能に近い市政を拒否し、人民戦線への加担を決定した。ユニークな「赤い郊外」となったこの都市は、国家及び経済指導部からコントロールされない牙城で、種々な地方的要求を基盤に郊外都市の発展のために努力した。とくに人民戦線期に、共産党を中心に、市政の交代劇が実現したことは、赤い勢力が、国民的な価値並びに未来を代表する価値の体現者となり得ることを予測させた。一九三六年の立法選挙で、共産党市長のA＝プティ Albert Petit が、第一回投票で四二・七％、第二回投票で六一・一％の高得票率で議員に当選した事実は、この間の事情を何よりも雄弁に物語っていた。

第六の論稿は、J－P＝ドゥプレトー Jean-Paul Depretto の筆に成る「企業におけるフランス共産党の定着の研究によって提起される諸問題（一九二〇－一九三六年）、ルノー Renault の場合」という論文である。[33] この論文は、J－P＝ドゥプレトーが、パリ第四大学に提出した修士号論文及び国家文書や多数の関連文献に依拠して書かれており、かつフランスにおいて、この種のテーマでは初めて究明が行われた論稿として注目される。この種のテーマは、理論的及び歴史的関心の両面から追求する必要がある。総じて、一九三六年まで、フランス共産党の企業細胞は過大評価してはならないとされる。党の「ボルシェヴィキ化」や経営者の弾圧の側面と同時に、フランスの革新側に、とくに地方組織は、社会民主主義の伝統に対する愛着心が持続していたことや、急進主義の考え方の比重が高く、政治活動は、選挙運動に限定すべきであると理解していた側面を重視する必要がある。また、共産党を「反社会的組織」として、あるいは大衆や大衆闘争から切断された機関として取り扱ったり、また、選挙結果への偏りだけで評価したりするのは、党の日常活動や日常闘争の実像を大きくドロップさせてしまう危険性を持っていた。J－P＝ドゥプレトーはさらに、この論文の叙述目的やその方向性を示唆した後、先ず、定着の土壌の認識という柱から論述を進めている。そこでは先ず、二つの前提条件が示されている。その一つは、ルノー工場内での共産党細胞の存在が、一定の役割を演じた点が、とくに一九三〇年代についての党員の回想録や一九二六年以降の警察資料等によって示されており、ルノー企業の歴史が、その内部資料によって示されている。さらに、「全体史」の必要性が述べられている。最初に、労働者階級の状態とその精神状況についての解明が行われている。ところで、両大戦間におけるフランス－プロレタリアートの歴史構造は、余り良く知られていない。(a) 実数とその発展について。多少の季節的変動が見られるのは、雇傭の安定度や労働者の闘争性に関連があった。ルノ

の場合、P＝フリダンソン P.Fridanson の分析によれば、二つの特徴、すなわち、一九三〇－一九三四年の恐慌による中断を除いて、全体として実数が大きく増加し、その実数が濃い密度を持つ点が挙げられる。一九一五年の二一、〇〇〇名が、一九三六年には三二、六〇〇名に発展した。毎年、需要の変動によって、かなりの職員が解雇された。(b) 三種類の職業構造について。その構造は、熟練労働者、賃労働者及び専門労働者によって構成された。ルノーの場合、資料が欠如しているが、自動車以外の産業部門（例えば、航空機）が存在したこともあって、熟練労働者の比率が高かった（一九二五年四六・三％、一九三九年三二％）。(c) 賃銀水準について。この指標は、労働運動を理解するさいの中心的な鍵を提供する。フランスの場合、アングロ－サクソン諸国と比べて、ストライキは「賃銀問題」を中心に多発している。賃銀水準の増減が、労働者の闘争条件やストライキそのものの性格に微妙な変化をもたらしているが、それを解明するだけの証拠書類は今の所活用できない状態である。再度、P＝フリダンソンの分析を借りれば、一九三〇－一九三五年に平均一五％ダウンしているが、一九三五年からは上昇に転じている。「ユマニテ」紙の主張や指導者たちの証言を基に考えると、恐慌中のストライキの大半が、一九三六年五月まで、防衛的な性格に終始し、しかもその目的が賃銀の単なる維持を指向していた。L＝ルノー Louis Renault を先頭にした経営者陣営は、その独自の経営者戦略に基づいて、職員の生活水準に打撃を与える剛柔種々な試みに成功した。こうした経営者側が、大不況を克服するために利用した色々な巧妙極まる手段や、それらに対抗する労働者階級の抵抗の限界については、各種の資料を駆使して証明することができる。(d) 労働者の精神状況について。労働者の賃銀水準、労働時間、それに衛生設備や労働規律等の労働条件は、労働者階級の精神状態や工場の「雰囲気」を測定するのに役立つ。そのためには、労働者出版物の検討はもちろんのこと、労働者とのインタヴューや単なるゴシップの類いの資料をも活用せねばならない。フランス共産党の闘争の条件を確証するためには、その統一や戦闘性の要因と同時に、その分裂や弱体化の要因をも検討して見る必要がある。労働災害の発生、衛生設備の欠如や賃銀の減額等は、統一へのテーマとして大々的に活用されたが、経営者戦略に基づく、賃銀や労働資格のヒエラルヒー、労働や報酬様式の多様性、それに職場長と労働者職員との権限関係（例えば、「ブラック－リスト」作り）等は、分裂への要因として大きく作用した。J－P＝ドゥプレトーは、ルノー工場の実態に即して、その幾つかの例証を述べている。続いて、過去の闘争の遺産に筆が及んでいる。地域的に見ると、ルノーで働く熟練労働者は、そのほとんどがパリ地区の労働市場から徴募された。居住地も大体、パリ地区に存在していたが、パリ郊外となると、仕事場と住

居地の分離が目立った。パリ地区における共産党の定着に関しては、かなりの修士号論文が出されているが、そこでは、それぞれの市政の征服が、どういう支点で、共産党の戦闘的な定着を招来しているかが、大きな関心の的となっている。共産党の定着は、社会民主主義の伝統との間に大きな困難を惹き起こすと同時に、セクト主義の偏向をも生み出した。工場自体において、社会党と共産党との連続性及び非連続性を識別する必要があった。全国情勢ももちろん考慮しなければならないが、総じて、一九二〇年からは左翼の分裂が進行し、一九三四年からは統一への前進が見られた。党を取り巻く客観的条件の考量だけでは限界があり、とくに党の主体的な関与、その行動の強靱性、党指導者の質並びに党の環境への適応能力等、いわば党の主体的条件を具体的に分析することが必須であった。ルノーの場合、フランス共産党には同一性が認められなかったし、その歴史は、中央委員会や政治局の単なる専断の果実ではなかったし、また、経済的、社会的諸条件や労働者闘争のそれぞれ単なる「残滓」でもなかった。ストライキを詳細に検討する前に、組織の定着及びそこで共産党が演じた役割を研究するのが、よりベターな方法であろう。次に、企業組織の定着が論述されている。ルノー工場における細胞自体の創設、その定着様式、細胞員の発展、その社会的基盤、さらにその日常活動等は、企業新聞、ちらし、ポスター及びパンフレット等によって論証することができる。また、一つもしくは二つのストライキを正確に研究する必要がある。細胞が、秘密活動、半合法的活動及び公然たる活動を行っていた時期の状況は、それぞれ全く違った様相を持つ。先ず、ルノー工場細胞の創設と発展についてであるが、細胞の前史については、「ユマニテ」紙や、とくに夕刊紙「インタナショナル」L'Internationale 紙によって、例えば、すでに一九二一年に一共産党員が集会の呼びかけをして解雇された事実や、すでにこの頃共産党員が工場内で活動していたことが察知できる。細胞の創設については、警察報告書、「ユマニテ」紙、「カイエ＝デュ＝ボルシェヴィスム」誌、党地区協議会報告書、それに党員の証言や国家文書等により、一九二五年にルノー工場内には三つの細胞、すなわち大工場細胞、O工場細胞、それに共産主義青年同盟細胞が存在していたことが明らかにされている。「秘密三角組織」が、その連絡機関であった。党員の十分な数でもって、共産党定着の社会的基盤が決定される。党の「ボルシェヴィキ化」の時期には、一連の細胞番号が付され、党員は一つの企業細胞に配置された。その後、地域細胞組織による修正が行われた。一九二四年、紙上にある企業細胞は、実際には機能していなかった。党員数の発展を見ると、ルノー工場では、一九二四年四月、十人余り、同年十二月、一〇〇人近くいたのが、一九二六年五月のストライキの後、一九三一年、十九名に減った。当時、統一労働総同盟のメンバーは、

六〇名から六十五名であった。一九三四年、六名だった党員は、細胞が秘密裡に再建された後、一九三五年二月、六〇名となったが、一九三六年五月までそのままの停滞状況が続いた。当時、統一労働総同盟のメンバーは、一八〇名を数えた。ところで、ルノー工場は、党の企業定着が一応成功した例として挙げられている。社共の統一や人民戦線の飛躍を経験した後、フランス共産党の活動は一層有利に展開したが、それまでの間には、一九二六年と一九三二年のストライキ、その後の組織破壊及び組織再建という繰り返えしが、貴重なデーターを蓄積し続けていた。次に、細胞の日常活動について論及が行われ、先ず行動の場所として、一九二〇年代初期集会は企業内では開催が不可能であった。初めの細胞は、外部、すなわち街の地方細胞の手で創設され、党中央委員会に直結していた。当時のちらしや「ユマニテ」紙によると、「ボルシェヴィキ化」の時期の弾圧やそれに対抗する闘争条件が特別に浮彫りにされている。一九二四年以降、セーヌ県連盟の指導の下で、工場集会がルノー工場の門の出口の場所で開かれ、ちらしや演説等による扇動宣伝活動が展開された。種々な要求活動を主に、組合及び政党活動の維持が図られ、工場内への浸透の条件が模索された。それらの要求の中には、工場代表者の選挙や有給休暇制の要求等、人民戦線の走りのものが見られた。組合レヴェルでは、パリ金属労組及びパリ地区労組連合指導者たちの支援を見逃すことができない。ここでも、フランスの社会史や国民史の叙述方法を活用する必要があろう。宣伝とその支持として、各種出版物の販布や一定の募金活動、それに文書の販売活動等が挙げられるが、例えば、当時の指導者や組織は、ちらしやポスターの類いでルノー工場の分を持ち合わせていない。従って、企業新聞、国家文書F7シリーズの「工場細胞」資料、それに一九二四－一九二五年のコミンテルン文書のパリ地区に関する豊富なシリーズ等を活用せざるを得ない。[34] 新聞の場合、その製作方法は、中央のモデルに従い、一般的政治論文や工場の出来事に関する記事が多かった。次に細胞と組合活動については、共産党の活動及び宣伝の政治的経済的内容と組合組織との関係の性格を見究める必要がある。一九二一－一九三六年、労働総同盟とフランス－キリスト教労働者同盟ＣＦＴＣの組織は、ルノーにはほとんどなかった。ルノーには、統一労働総同盟とフランス共産党のカップル組織しか存在しなかった。両大戦間は、三つの時期に分けられる。一九二四－一九二六年、統一労働総同盟の組織は、ほとんど目立たない組織であった。一九二六年五月のストライキによって、党及び労組組織が破壊された。一九二九年に党が、続いて一九三一年初めに組合が再建された。この時期には、組合活動が党活動に優先していた。一九三一－一九三二年のストライキによって、組織及び運動がともに再度破壊された。一九三四－一九三六年、細胞が、企業組合支部より優位に立って、

組織再建に乗り出し、「些細な要求」をその主軸に据えた。これらの要求の経済的な性格は、何よりもルノー労働者の政治意識の低い水準から生じたものであったが、一九三五年五月一日の要求帳運動に見られるように、最低限の経済要求を中心に、一つずつ成功例を作り出し、それによって労働者の政治意識を高めて、より大規模な新しい闘争を展開するという、至って地道な活動が続けられていった。ルノー工場における一九三六年のストライキの諸条件は、このようにして準備されていった。最後に、ストライキにおける党という柱が立てられ、共産党組織が、どのように大衆運動の中へ挿入されていったかが解明されている。ストライキは、ことさら労働運動、労働者出版物、それに警察の注目を集める。ここでは、とくに、国家文書Fシリーズ（労働省関係）[22]、同Fシリーズ（内務省関係）[7]、それに「インタナショナル」紙、「ユマニテ」紙等が活用されている。もちろん、データーに不正確さがあり、グラフに欠陥があることは認めねばならないが、総じて、一九二〇－一九三六年、ルノーのストライキ運動は、一般的に弱さを示すと同時に、非連続性をも示した。とりわけ、一九二六年五月の労働停止及び一九三一年十一月－一九三二年一月の一連のストライキは、ともに賃銀削減に抗して生じたが、経営者側の物質的レヴェルの譲歩によって終焉し、その後いずれの場合も数年間組織が破壊されてしまった。経営者陣営は、ロック－アウトや、経済的条件で再雇傭を呈示する労働者への個人的な手紙という戦略で成功を収めた。一九二六年五月のゼネストの頃、細胞はかなり弱体化しており、例えば、O工場細胞では、党の定着が消滅し、ストライキ行動の開始も、共産党員の手を離れて実行された。また、大工場細胞では、ストライキの初め、党員は結集力を欠いていた。ストライキ委員会の共産党「分派」も弱体で、他のメンバーとの連繋も悪かった。ただ、共産主義青年同盟細胞だけが、活発に見えた。その他、外国人プロレタリアートが、徹底したストライキ参加者として活躍した。ルノーの共産党や統一労働総同盟組織は、改良主義的な政党や組合によって忘れられている労働者住民層、青年、それに移住労働者たちに積極的な働きかけを行う必要があった。一九二六年のストライキにおける専従者の役割では、党の組合支部は弱く、統一労働総同盟側が運動を指導し、集会を保障した。一九三一－一九三二年のストライキは、一、〇〇〇人余りが参加した部分ストライキであったが、党及び組合の下部組織が果たした役割は、ほとんど零に近く、ストライキ中集会すら持たなかった。闘争委員会は、党中央委員会「企業」委員会と連絡を取り、ストライキは、ルノー工場の共産党員、金属労組の「共産党分派」、それに党政治局の一メンバーの合同集会の場で準備された。ストライキの結果は、貧弱そのものであった。その後、党への加盟も、全然見られなかった。バルベ－セロール＝グループとそのセクト主義的

実践の除去は、ルノー工場内での争議にその例証を見い出した。すなわち、危機の時期に可能性のある闘争はないとする改良主義的労働総同盟の理論は否認され、闘争委員会内で統一労働総同盟派、労働総同盟派、フランス－キリスト教労働者同盟派及び未組織労働者の統一戦線（とくに、失業者との団結が強調された）の実現が注目され、そして、この統一は、仕事場や企業における経済的諸要求を基礎にして実現する必要のあることが強調された。一九三六年五月のストライキ以後、ルノー工場には、強力な細胞が定着するに至った。

第七の論稿は、アンヌ－マリー及びクロード＝パンヌティエ Anne-Marie et Claude Pennetier 両名の筆に成る「シェール le Cher 県の共産党指導者たち」という論文である。[35] この論文は、前出のリスト中にある、両名の共同修士号論文（オーディール社刊行のマイクロフィッシュ、アシェット社　六〇五頁）及びC＝パンヌティエの第三期博士論文「フランスの農村諸県における社会主義と共産主義、シェール県の例を中心として」に依拠して書かれている。さらに、この論文は、党の全国大会報告書、シェール県文書AD、国家文書AN、それに民間資料や地方機関紙誌（とくに、「解放者」L'Emancipateur 紙）、口述又は文書による党員の証言等を広く渉猟した上で書き上げられている。シェール県では、一九二四年の立法選挙のさい、共産党が登録有権者の二四・七％の票を集め、一九二八年の立法選挙では、二六・二％の得票率を収め、最良の記録を残した（因に、一九三二年は、一六・六％、一九三六年は、二二・一％）。その中心勢力は、一九二五年一月に確定した、ブルジュ Bourges 市を中心とする共産党中央地区であり、党員数の推移を示せば、一九二一年三月が一、二〇〇名、一九三六年十二月が二、五〇〇名であった。筆者たちは、党創設時の指導者一一七名及び一九二一－一九三九年の著名な党指導者四二六名のリストを丹念に探索検討した上で、論述を進めている。先ず、シェール県共産党連盟の創設指導者たちについての論証が行われている。共産党創設及びそれ以降、党執行委員会CA等で活躍した有名な県指導者（ノール県、セーヌ県出身者も含む。さらに、ブルジュ軍需工場EMとの関連性が重要）が、その名称とともに実証的に研究されている。一九二四年の立法選挙を例にとれば、シェール県には、当時まだ、同質の党指導部はなかった。トゥール大会から一九二四年末まで、党勢力は若干後退している。党グループ数は、四二から三七へ、党員数は、一、二〇〇名から一、〇〇〇名へと、それぞれ減少している。党創設及び党建設に関わった一一七名は、年令別に見ると、二〇－四〇歳が五一・五％、四〇歳以上が四八・三％であり、その中一九三九年まで重要な役割を果たす三〇－四〇歳が三五％、さらに一九二四年以降の党発展の重責を担う一八－三〇歳が一六・五％を占めていた。県連盟の地域差、農村と都市における分布図、

さらに職業集団の役割等が考慮されねばならない。一一七名中、五六名（四八％）が農村出身者、六一名（五二％）が都市出身者であった。因に、一九二四年、シェール県の都市住民は、全住民の二八・七五％であり、それ以前の一九二一年の活動人口中、五二％が農業人口、約三分の一が工業人口であった。一一七名の中、農民出身者は二九名（二四・七％）、工場労働者出身者は五二名（四四・四％）であった。従って、党組織の中で、都市、工業及び労働者の比重が高かったことが判明する。シェール県では、共産党及び共産主義青年同盟等の組織は、工業地区の労働者階級を主な対象として党員募集を行いかつ定着していった。続いて、新しい労働者指導部の突破口について論述が進められている。党構造の再編成の目的は、労働の場所で党員組織を拡充することによって、党が労働者階級内に定着することであった。そのさい、古い社会党の実践や精神との断絶が必要であり、これに代わる新たな労働者指導部の出現とその強化とが必須条件であった。党の「ボルシェヴィキ化」命令が指向したものは、正にそれらであって、この方針は、シェール県党組織内でほとんど議論らしい議論を惹き起こさずに即刻実行に移された。とくに、「組織のボルシェヴィキ化」は、企業細胞の創造と農村細胞の創設とを強く要請する内容を持っていたが、シェール県では、既存の党集団（グループ）が、そのまま細胞に衣替えされた。地区組織としては最大のブルジュ地区を中心に、そこでの六つの細胞の活動や統一労働総同盟の動き、それに指導者たちの姿等が生き生きと映し出されている。そこでは、階級対階級戦術の一義的な適用に関する幾つかの例証を見い出すことができる。最後に、農村の党指導者たちについて言及がなされている。シェール県の共産主義運動の中で、農民及び農業プロレタリアートの占める比重は高かった。ところで、県中央部の都市共産主義と県周辺部の農村共産主義とでは、その活動条件や党員構成が違っていた。一九二一－一九三六年、県の六四％が農村及び工場を持たない小都市で構成されており、また、党員の三四％が農民層であった。農村共産主義の発展には、トゥール大会から一九二四年までと一九三四年以降という二つの画期が見られたが、党及び勤労農民総同盟ＣＧＰＴ等の組織定着は、貧弱な相貌しか示していなかった。概して、農民層は、素直に共産党の目標に賛成の意思表明を行ったが、その農業政策に関しては、小土地所有制の堅持という確信から、反軍国主義や反議会主義、ソ連邦の威信に対する程敏感に反応を示さなかった。シェール県の農民層には、共産党連盟が、社会党連盟の組織的継承体と映じ、従って、「分派」組織等は許容せず、とくに、一九二四年以降は、党の等質性や継続性に極めて敏感な態度を採った。ところで、農村細胞には、幾つもの隘路が存在していた。すなわち、そこでは、適切な指導者養成が欠如し、党員教育が困難であり、読書は主に新聞に限られ、集

会は月々にしか開かれず、地区集会への参加も極く限られていた。傑出した指導者はいたが、総じて、農村細胞は孤立した状態に置かれており、見方によっては、それだけ自治への渇望が強かったといえよう。農村における党員構成は同質でなく、農業労働者（一八％）、森林伐採労働者、農業耕作者（一六％）、それに職人、商人層等が混在していた（官吏層は、極く僅かであった）。さらに、その地理的分布図を考慮しなければならない。組合組織率は、五四％であった。細胞及び組合の書記たちは、農村の枠を越えない形で活動し、個々人の趣味、論文や演説能力、ひいては素養といった点で十二分な資質を具有していたとはいえなかった。一九二八年レヴェルで、分益農七％、小作農二〇％、それに農地所有者七三％がいたが、共産党の基盤は、圧倒的に農地所有＝耕作者層であった。シェール県農村におけるオリジナルな側面は、農村における革命的伝統が古くから継承されていた点であり、農民層の中でも森林伐採プロレタリアートの果たす重要な役割が一貫していた点であった。ところで、党構造に占める中小農民層の比重の低さと、とくに農民指導者の欠如という特徴をも抽出することができた。この種のテーマの研究では、まだ数多くの側面が取り残されている。しかし、全国レヴェルでの大指導者こそ生み出さなかったものの、数多くの地方リーダーシップによって、党がその深さと多様性とを持って定着し、これらの指導者たちとその堅固な組織とが維持され続けた、シェール県の本ケース－スタディは、幅の広い光彩を放っているといえよう。シェール県では、一九三二－一九三六年、一時社会党勢力の挽回が生じたが、人民戦線、レジスタンス、解放を転機に、共産党が再度立ち直りを見せて優位に立った。

第八の論稿は、J＝ジローの筆に成る「共産党と有権者、一九三六年におけるヴァール le Var 県の例」という論文である。[36] この論文は、ヴァール県文書と各種試験的調査を基にして書かれている。立法選挙の研究は、共産党の定着を研究するさいの有効な接近方法である。ヴァール県では、長く社会党の地位が保障されていた。社会党及び急進社会党はしばしば混同され、「社会党」という呼称の下で「赤いヴァール県」を特徴付けていた。一九一四年、五人の中四人の議員が、社会党もしくは労働党の代表であり、一九一九年、社会党名簿は、当選者こそ出さなかったものの、登録有権者の平均二二％を獲得した。一九二四年選挙では、「赤い連合名簿」が勝利を収め、社会党四名、急進社会党一名がそれぞれ当選を果たした。一九二八年選挙は、新しい郡選挙制で施行され、社会党が五つの議席の中四つを占めた。一九三二年選挙では、この傾向がさらに強化された。そして、一九三六年選挙では、人民戦線派候補が勝利し、四名の当選者の中二名が共産党代表であった。共産党の左派勢力内での浸食は、一九三二年に一時弱まったが、一九三三年の社会党分裂によって加速された。ヴァール県の

社会党議員は、四人とも、P＝ルノーデル Pierre Renaudel と行動を共にした。ヴァール県の選挙団体の構造と一九三六年の選挙結果との関係が解明されねばならないが、この論稿では、立法選挙に限定され、他の選挙、政治組織、政治的社会的闘争、経済的状況、財政構造、それに選挙運動等の役割は除外されている。一九二八年以降、ヴァール県は、五つの選挙区、すなわち、ブリニョール Brignoles 選挙区、ドラギニャン Draguignan 選挙区、トゥーロン Toulon 第一、第二、第三選挙区、に分かれた。ところで、共産党の選挙結果には、連続性はなかった。一九三二年選挙では、全国的に落ち込みが目立ち、一九三六年選挙では、とくに第二回投票で共産党の選出が目立った。共産党は、トゥーロン第二選挙区を除いて、一九三二－一九三六年、一四％以上得票率を伸ばした。そのトゥーロン第二選挙区でも、一九三五年の補欠選挙では、共産党が当選を果たし、得票率も一九三二年と比べ一〇・五％の伸びを示した。翌一九三六年には、さらに大きな進展が記録された。ブリニョール選挙区では、平均して共産党得票の前進が実現した。一九三四年の郡選挙と一九三五年の市町村選挙の実績が、このことを証明している。選挙団体の全般的な構造を分析すれば、共産党の一定の前進を説明することができる。一九三二年選挙で、ドラギニャン選挙区とブリニョール選挙区は、最良の得票率を獲得した。そこでは、「農民」有権者率が最も高く、「労働者」有権者率、六〇歳以下及びとくに三〇歳以下の有権者率が最も低かった。老令化する農村選挙区が、問題点であった。最悪の結果は、完全に都市化されていた、トゥーロン第一選挙区で見られた。ところが、一九三六年選挙で、一つの激動が生じた。ドラギニャン選挙区とブリニョール選挙区では、依然として良い結果が得られたが、トゥーロン第二選挙区でも最良の結果が得られた。そこでは、「労働者」有権者が最も高い得票率を示し、かつ「農民」有権者も適宜な得票率を示していた。とくに、外国人で、六〇歳以下の高い有権者率が、極めて有利な要因として作用した。こうした得票結果と政治行動との関係が、解明される必要がある。一九三二年選挙でも一九三六年選挙でも、棄権票の多い選挙区では、共産党は良い結果を獲得していない。一九三六年選挙では、共産党の圧力の強かったトゥーロン第二選挙区、ドラギニャン選挙区及びトゥーロン第一選挙区で、第二回投票時の棄権票は、第一回投票時のそれを上回っていた。立候補取り下げの研究の重要性が、そこから生まれる。トゥーロン第一選挙区で、社会党は、一九三二年選挙のさい悪い結果を得ているが、一九三六年選挙で共産党も同じ結果を経験した。共産党が選挙上最良に定着した選挙区は、強力な左翼への方向性を保持していた選挙区であった。ともあれ、ヴァール県で、共産党は、一九三二－一九三六年に、一定の前進を示した。右派は、一九三六年選挙の第一回投票と第二回投票の間で後退を示し

た。共産党の選挙結果は、選挙区が「左派」的伝統を持てば持つだけ強力であった。「赤いヴァール県」は、結局の所、共産党を受容した。一九三六年、四選挙区で、二人の「社会党」候補の得票率は、一九三二年の一人の候補のそれに及ばなかった。ドラギニャン市では、非共産党的左翼の得票全体が、一九三二年の社会党の選挙結果を越えて著しい前進を示した。共産党の定着は、右派が一九三二年に比べて後退した選挙区で良い結果を獲得している（トゥーロン第二選挙区、ドラギニャン選挙区及びブリニョール選挙区）。これら広範な票の移動や、新登録者の票、それに棄権者の票の動向を解明するためには、今後、体系的な郡及び市町村研究及び党、党活動並びに党指導者等についての決定的なデーターによる分析が必要である。続いて、J＝ジローは、一九三六年選挙に焦点を当て、五つの選挙区のそれぞれについて、最初に明らかになった事実、共産党の投票結果と選挙団体、共産党の投票結果と可能性のある政治選択、そして極端なケースという幾つかの項目で具体的な論述を進めている。そこでは、それぞれの選挙区の各郡、それに主な市町村での動向が具さにフォローされている。総じて、立法選挙の研究は、共産党の定着の諸形態の一つを解明するのに役立ち、また、党の色々な歩みを理解する前提条件の一つでもある。とくに、社会職業的、政治的研究は、一九三〇年代における共産党の選挙上の影響力のメカニズムを理解することを可能にし、また、共産党組織の生命力を説明することを可能にする。政治的伝統が、説明の主たるファクターである。「赤」とか「客観的」条件の抵抗が、定着する側の組織の弱さや不十分さと結合した。有権者の社会職業上の差異は、他の説明のエレメントである。ヴァール県で、党は農村で成功を収め、また、労働者の存在が党のより良い定着を有利にした。労働者階級の条件、とくに資格の程度や労働の性格が、大きく作用する。また、ヴァール県の政治生活で、外国人の果たした重要な役割を注目すべきである。共産党は、都市及び工業地帯でとりわけ成功を収めた。恐慌時に、多くの障害が、広範な階級的連帯や指導者たちの役割で消滅していった。ヴァール県での共産党の選挙における前進は、いわば党の強力な定着の論理的結果であった。

最後に、第九の論稿は、J＝ジローの「二〇世紀におけるフランス労働運動、とりわけ共産党の定着の研究のための手引及び幾つかの提案」という論文である。[87] 全国政治学協会での幾つかの労作の成果や、とくにP＝バラル著『選挙社会学と歴史』P.Barral,Sociologie électorale et histoire,Revue historique,juil.-sep.1967. 等が、参照されるべきである。パリ及び地方における公共及び民間保管文書の現況は、おおよそ次の通りとなっている。一九七〇年一一月一九日、第七〇－一〇六六号政令として公布された、文書伝達規則は、

「五〇年」、すなわち、五〇年経過しなければ資料を一般公開しない、という伝統的な規則を和らげた。規則第一条は、官公庁、公共事業及び公共機関によって、国家文書館又は県文書館に移された、一九四〇年七月一〇日以前の資料は、公衆に伝達されると規定している。第二条は、前記第一条に反して、その暴露が公共の利益の保護あるいは個人や家族の名誉にとって不都合な資料は、文化事業担当の大臣及び資料の移送を実施した官公庁、公共事業及び公共団体が依拠する大臣の共同の省令によって、一定の期間を経過した後に各団体に伝達されると規定している。一九七一年七月二一日の省令が、新しい規則を次のように定めた。すなわち、国家文書館及び県文書館に保存されている、一九四〇年七月一〇日以前の資料の公衆への伝達は、その資料が次のカテゴリーに属する場合には留保される。(1) 内務大臣官房の政治書類の伝達は、その書類の日付を考慮して、五〇年間は留保される。(2) 知事部局の政治書類に関しては、(1) の場合と同様である。(3) 一般警視庁の書類の伝達は、一九三四年一月一日以降の分が留保される。(4) 一般軍情報機関の書類に関しては、(1) (2) の場合と同様である。(5) 職員の書類の伝達は、関係者の出生日を考慮して、一〇〇年間は留保される。第三条は、前条に引用されているすべての資料の伝達は、① 国家文書館の資料に関しては、内務大臣の同意の下で、また、県文書館の資料に関しては、知事の同意の下で、さらに、② フランス文書館理事長の許可の下で、許可されると規定している。フランスの公共文書館に収められている大保管資料は、次の通りである。① 国家文書。F[7]シリーズ（一般警察）が主であり、F[12]、F[22]シリーズ（商業、工業、組合組織、ストライキ等の関係）と特別なシリーズとがある。② 警視庁文書。主にパリ地区のものであるが、全国的な価値を持つ。③ ヴェルサイユ国立図書館別館資料。県、年代及び大きな項目（劇、政党、等）ごとに分類されたポスターが、合法的に保管されている。すべての政党や組合のポスターは、寄託されていないが、参照することはできる。④ 国民議会及び上院文書。全選挙調査及び議会委員会の審議記録が含まれている。⑤ 軍事文書。例えば、トゥーロン第三海軍管区文書が含まれている。⑥ 県文書。体裁は、保管所ごとに違っている。一般行政に関するMシリーズが、最も重要である。⑦ セーヌ県文書。一九二〇年からの資料分類が、進行中である。首府の特別規程が、二つの主な資料（警視庁とセーヌ県庁）を決定し、これらの資料の移送は、セーヌ県文書館、警視庁文書館、パリ市（パリ市役所）管理図書館及びパリ市歴史図書館に分布している。⑧ 綜合図書館資料。本や小冊子以外に、地図やプランを保存している。⑨ コンミューン文書。地方史の熱心な文書収集家によって、分類が行われている。次に、組織及び党員文書並びに他の可能な資料が挙げられている。大政党（とくに、共産党、古い社会党）が、整理した文

書を引き渡すだろうと考えるのは幻想である。モーリス＝トレーズ研究所は、党員の寄託したものやコミンテルン－フランス基金のマイクロフィルム（モスクワのマルクス－レーニン主義研究所の寄贈）でもって、フランス共産党の戦前の文書の一部を再構成中であり、かつこれらの文書を検討中である。フランスの特別の機関、フランス社会史研究所、労働組合運動史センター（パリ第一大学）、モーリス＝トレーズ研究所、将来設立される予定のレジスタンス博物館、それに第二次世界大戦史委員会、等が、それぞれ文書を保有している。党員たちは、口述の証言以外に、彼らの「記録」を保持している。一定の文書が、各種行政機関に保有されている。例えば、一九二九年の農業調査の結果やコンミューン統計が、県農業機関部局に保存されている。教育に関する科学調査や財政に関する各納税機関も、同様である。これらに、他の調査の場所、すなわち、商業会議所、労働紹介所、組合連盟、協同組合、新聞所在地、それに企業等が加わる。続いて、印刷された資料が挙げられている。全国日刊紙（「ユマニテ」、「ポピュレール」紙、等）はいうまでもないが、地方紙は、国立図書館（ヴェルサイユ別館）の法定保管所に保存されている。共産党及び社会党の定期刊行物は、国立図書館のコレクション、県文書のMシリーズ及び市町村図書館の中に収録されている。また、県文書保管所の中にあるTシリーズは、新聞のデーターである。ところで、共産党に対する企業新聞のコレクションは、四散した状態にある。パリ地区の出版状況は、地方の出版状況程良くない状態である。次に、印刷された大シリーズが挙げられている。例えば、(1)「フランス一般統計」、「フランス共和国官報」、「議会討論集」及び「政界人名録」« Barodet »等や、県レヴェル及び大都市レヴェルでの同種の資料、並びに、(2) 幾つかの代表的な著作物が、これに含まれる。さらに、文献のスケッチが述べられている。そこでは、(1) 一般的なもの、例えば、社会運動誌、モーリス＝トレーズ研究所史学雑誌、フランス政治学雑誌等、及び(2) より専門的な文献、例えば、地域の文献、地方関係の論文、地理関係の著作物、それにタイプ版の労作等が挙げられている。労働運動内の政治勢力の定着をより良く研究するためには、印刷された文書資料（とくに新聞）を主に検証し、研究地域に無縁であってはならず、党員をよく認識する必要があり、また困難な仕事を問題ごとに区分けしかつ共同研究組織で検討する必要度が高いことが強調されている。

次に、資料の取り扱かい方法についての注意が論述されている。経済関係のデーターとして、とくに県及びコンミューンのレヴェルで、農業会議所、商業会議所の調査や報告書、県議会討議集、それに土地台帳や財政文書等が挙げられる。人口関係のデーターとしては、いわゆるMシリーズや、例えば旧セーヌ－エ－オアーズ県文書（ヴェルサイユ）等が挙げられる。何度もいうように、選挙の研究は、党定着解明

の一つのアプローチである。(a) 選挙結果については、選挙委員会の報告書、前記した県文書中のMシリーズ、それに出版物や各種新聞及び投票一般調査報告書（国民議会文書）等が参照されるべきである。得票率は、登録有権者との対比で計算すべきである。[38] さらに、この点について、定期的に発表される全国政治学協会での研究蓄積を参考とすべきであろう。(b) 選挙団体については、県文書館が、選挙名簿を五年間保存することになっている。(c) 社会職業集団については、国立統計－経済研究所 INSEE の資料等を参照すべきであるが、第一グループ＝農民、第二グループ＝経営者、第三グループ＝自由職業と公共及び民間部門の管理職、第四グループ＝中間管理職（教師、技術者、等）、それに第五グループ＝工業労働者といった「社会諸階級」を微細に検証する必要がある。諸組織の解明は、新聞、文書、警察報告等によって行う必要がある。在郷軍人集団、スポーツ組織、協同組合、レジャー集団、借家人集団、催し物、文化組織等を初め、秘密結社、人権同盟、労働組合、各種共和組織等が、色々な角度からメスを当てて解明されるべきである。口述資料は、インタヴューによるもの、テープレコーダー、記録及びノートによる党員の回想録、党員に近い世論のそれ、教師に対する質問状、それに社会学者や人種学者の方式に依ったアンケートによるもの等が含まれる。最後に、主な研究方向について論及されている。選挙現象に、過度のスペースが与えられてはならない。共産党定着の研究に対して最大限のアプローチを行うためには、労働組合運動、労働者の闘争、ストライキ、各種組織、協同組合等の分析はもちろんのこと、都市及び農村の風土、生活諸条件、社会諸関係等の分析や出版物（共産党のものと非共産党のもの）、地方誌、各種報告書（非政治集団のものも含む）及び宗教行事、青年活動、儀式、レジャー、催し物といった環境の伝統を構成するすべてのものの分析を深める必要がある。そのさい、社会史の大きなテーマが、研究の方向を暗示するであろう。データー処理は、情報科学による資料の利用方法を参考とし、かつ研究者は今後、基礎的な統計知識を持たねばならない。こうして、定着の研究は、全体史の概念に接近する。歴史をイデオロギー的実践に奉仕させるという狭い考え方は、排斥されねばならないであろう。

以上見てきたJ＝ジローの編著は、フランス共産党史研究の発展にとって一段階を画す内容を持っている。J＝ジローらは、例えば、一九三二年以降、フランス共産党がはっきりとその選挙上の定着を実践し始めるという、非常に新しい仮説を示したり、[39] また、セーヌ県の十六の共産党市政による数々のユニークな実践が、党の全国政策にしばしば先行して実行された、その実例を提供したりしている。[40] もちろん、この編著には、幾つかのサンプルしか収録されていないが、前掲リ

ストに示したやや実証主義に傾斜した色々な考証を基にして、より科学理論的な詰めが今後行われていく必要があろう。

むすび

以上縷々述べてきたように、フランス人民戦線期の研究は、ローカルな拡散性を伴いながら徐々に蓄積されてきている。これらの研究成果を今度は集中化することによって、やがてフランス人民戦線の全体像が浮かび出てくるであろう。それまでにはまだ、かなりの日時と労力とが必要とされる。現在のところはまだ、一つ一つそのための礎石を築いていく地道な努力の段階にあるということができよう。

拙著の中で指摘したように、今までのフランス人民戦線政治史に関する研究は、全国レヴェルでの、それもとくに、パリ中心の域を一歩も出ず、民衆の生活基盤に密着した地方及び地域レヴェルでの研究、すなわち、民衆の深部から見た（下部から見た）フランス人民戦線政治史に関する研究は、まだ広大な原野をそのままの姿で残しているといえる。[41] ところで、全国レヴェルでの研究は、今後一層深化させていかなければならない多くの課題を持っていることはいうまでもないが、全国レヴェルでの内実を支え、かつ全国レヴェルに対して限りないインパクトを加え続けた、地方及び地域レヴェルでの研究も一層深く掘り下げていかなくてはならないであろう。前述した、当のフランスで一九七〇年代に開花し始めた地方史及び地域史研究の数々の成果は、こういった視角から早急に消化され、吟味される必要があろう。そのさい、歴史的手法としての社会史 l'Histoire sociale、全体史 l'Histoire globale 及び国民史 l'Histoire nationale の構図が、常に参照されなければならないであろう。[42] 従って、指導者（ミリタン）－党－階級－大衆の各層レヴェルにおける解明は、今後より強く「下部から」のアプローチを要求されていくであろう。

――一九七九－六－二十――

――一九七九－七－三十加筆――

（1）Cf. Bulletin du Centre d' Histoire du Syndicalisme (CHS), N° 1, Année Universitaire 1976-1977, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne, Paris, 1978.

（2）拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社　一九七七年参照。最近、幾つかの論稿において、拙著の引用及び書評等が見られるようになった。例えば、山本佐門「コミンテルンの社会ファシズム論」『現代と思想』30　青木書店　一九七七年　一〇二頁、加藤哲郎「コミンテルン第七回大会の国家像―ファシズム認識と統一戦線＝人民戦線論―」天野和夫他編『マルクス主義法学講座②　マルクス主義法学の成立と発展〔外国〕』日本評論社　一九七八年　二七六頁、藤田勇「人民民主主義構想の成立過程をめぐって」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』5『ヨーロッパの法体制』東京大学出版会　一九七九年　四〇七、四〇八頁、加藤哲郎「世界政党と政策転換（一九三四－三五年）―コミンテルンの政治学的予備考察―(一)」名古屋大学『法政論集』第七十八号　一九七九年　一二六、一三一頁、平瀬徹也「〈書評〉平田好成著『フランス人民戦線論史序説』」立正大学『立正史学』第四十五号　一九七九年　一二九－一三三頁、海原峻『フランス社会党小史』新泉社　一九七九年　二五八頁、等を参照。平瀬氏の書評は、再掲載させて頂く。

「

一

著者平田好成氏はこれまでフランス人民戦線に関して二十篇ちかい論文を発表しておられ、今回それらを基礎に本書を上梓された。氏の二十余年間の研究に一応の区切りをつけるものとして氏自身も本書を手にされて感懐ひとしおであろう。これまでの氏の業績に啓発されることしばしばであった評者としても慶賀にたえない。ただ、専門分野を同じくする者として本書に関して内容上の疑問や注文を呈することは氏の業績に対する敬意とは何ら矛盾するものではないと信じて、以下、多少批判めいたことを記すつもりである。それが的外れでないことを祈るばかりである。

さて本書は、

1　プロローグ――フランス人民戦線研究の現状――
2　統一戦線
3　人民戦線
4　コミンテルン
5　現代への系譜
6　エピローグ――一つの総括――

の六章に分れている。各章はおおよそクロノロジカルに配置されていることになるが、本来問題別の章のたて方であり、厳密にクロノロジカルではないので、叙述がときに行きつ戻りつしているのは止むを得ない。そのこと自体は欠点とは言えないが、ただ、それが本書の叙述をやや重複の多いものにしていることは否めない。

本書は「まえがき」の文章を借りれば、「フランス人民戦線政治史を、コミンテルン－フランス支部ＳＦＩＣ（当時のフランス共産党の正式名称）のリーダーシップに一つの照準を据えてアプローチを試みてきた」氏が、「これら一連の論文を集大成し、かつ極く最新の資料等を参照しながらできる限りでの補足及び修正を行ったもの」である。すなわち、本書は端的に言って「人民戦線とフランス共産党」ないし「人民戦線期のフランス共産党史」ともいうべき内容である。「まえがき」を一読すればそれは当然のことであるが、本書は必ずしもフランス人民戦線全般にわたって叙述したものではない。同様に、本書は氏の既発表の諸論文の「集大成」ではあるが、詳論や史料的根拠の明示を既出論文に譲っている場合がときに見られる。その都度註記されているので別に問題はないと言えるし、量的制約から避けられないことであったかもしれないが、氏の諸論文の殆んどが現在では入手困難な紀要掲載論文であることから、研究者には多少の不満が生じるのは残念ではある。

二

フランス共産党といわず何れの国の場合であれ、共産党史に関連する諸事実を取りあげる場合、肯定的立場に立つにせよ否定的立場に立つにせよ叙述がともすれば党派的となりがちであることは周知の通りである。現代史一般につきものの時間の隔りの不足に由来する非局外者的熱情に加えて、このテーマそのものの強い政治性、党派性が冷静な分析よりも情熱的加担や拒否を生みがちであった。しかし、そうした予想を抱いて本書を手にした人は意外の感に打たれるかもしれない。著者は過度に論争的になることに対して警戒を怠らず、史料に依りつつ冷静に論をすすめるよう能う限り努めているからである。本書のようなテーマに関してはこれは貴重なことと言わねばならない。

だが、長所と短所は紙一重であり、しばしば重なり合っているものであろう。過度にポーレミカルである必要は全くないが、本来論争的なテーマを取りあげた場合、非論争的であることがつねによい結果をもたらすとは必ずしも言えない。本書に対して評者が感じた不満もその辺りに発しているように思われる。

本書においてはフランス共産党系の文献史料の博捜ぶりは相当のものであり、本書のいくつかある長所の一つとなっているが、フランス共産党に対して批判的な文献史料はＡ・クリージェルらいくつかの例を除けばあまり利用されていない。それが本書を非論争的にしている一つの要因であるように思われた。

言うまでもなく本書の扱う諸テーマに関して共産党系の出版物は第一級の史料である。だが、重要史料であってもやはり史料批判は必要である。そして、史料批判は当該史料に即しても可能であるが、他のソースに発する史料とつき合わせることにより、より容易に可能となるだろう。まして党派性と切り離せないテーマであれば、そうした扱いは望ましく、むしろ不可欠なのではなかろうか。

以上のように述べたからといって本書が当該時期のフランス共産党に対して無批判的であるというのではない。それどころか、本書の至るところでM・トレーズをはじめとする党幹部やコミンテルン幹部にさまざまの批判が加えられている。それらの批判は、「当時のコミンテルンによるファシズム分析や統一戦線戦術の理解等には、幾つかの決定的な誤りがあったし、それを鸚鵡返しに解釈するフランス共産党も幾つかの大きな誤りを重ねた」（五一頁）といった事実的なものから、「フランス共産党指導部の大部分の者が、マルクス・レーニン主義の古典については、非常に表面的な知識しか持ち合わせていなかった」（二〇〇頁）といったより根元的なものまでけっして乏しくない。ただ、本書における諸批判はフランス共産党幹部やP・トリアッティらが一九三〇年代以後おこなってきた自己批判を大きく超えるものではないとの印象をうける。いわば、かれらの為した自己批判の一層の深化は見られるにせよ、全く新しい、別の角度からの批判には乏しいと評者には思われた（具体例については後述する）。そのことが本書の依拠する文献史料の偏りと無関係とは考えられない。

読者の誤解を避けるために一言すれば、著者が非共産党的および反共産党的文献史料に通じていないのでは全くない。そのことは本書中の詳細きわまる参考文献リストを一読すれば明らかであるばかりでない。氏の既発表の諸論文の註にはしばしばそうした文献史料の名が挙げられていた。ただ、過去においても氏のそれら文献史料の扱い方は何れかと言えば禁欲的、非論争的であった。そうした禁欲性は本書においても基本的にはひきつづき守られており、それが本書にプラスになる反面、一部物足りなさを覚えさせることにもなっている。

三

つぎに、前節で述べたやや一般的な批判の裏付けの意味で個々の具体的事実やその評価の批判に入りたい。本書の叙述順序に従ってまず、「フランス・ファシズム」の問題から入る。

著者は極右諸リーグ――一九三〇年代のフランスでその過激な街頭行動でしばしば人びとの耳目をうばい反ファシズム人民戦線の結成をもたらす重要な因子となった右翼諸団体――の実体に一瞥を加えた上で、「総体として見れば、一九二四年から一九三六年までの間、フランスには真正のファシズムは存在していなかったと考えてよい。」（三九頁）、「『フランス・ファシズム』

は、一種の神話にしか過ぎなかったと言えよう」（四一頁）と結論される。これはフランスにおける最近の研究動向と一致しており、私も以下の留保を付してではあるが同感である。しかし、諸リーグの中には「フランシスム団」をはじめとしてファシズムに分類可能なものもあり、欧米学界においても左翼がおそれたような政権奪取の現実的可能性が問題となるような強力なファシズムは存在しなかったという意味でフランス・ファシズムの有無が論議されていると私は理解している。(1)

氏自身もときにそうした意味合いをこめて否定説を主張されているようにも受けとれる（「従って、『フランス・ファシズム』の可能性を過大視することは誤りであろう」四一頁など）が、諸リーグの「運動論や組織論」（二八七頁）を重視したためともとれる箇処もいくつかあり、いま一つ明快でない。ともあれ、そうした研究状況であれば、「一般的に言って、少なくとも一九三六年以前の段階では、『フランス・ファシズム』の伝説を正統化出来る史実は何もないと一応結論づけることが出来る。」（二八七頁）とされるのはやや断定が過ぎるのではなかろうか。危険の現実的可能性とファシズムの存在の有無とは一応区別した方がよいと思われる（氏や中木康夫氏に影響を与えたと見られるR・レモンの所説自身ときに両者を混同した表現を使用している。）。

つぎに、フランス人民戦線政府が直面した経済的困難について、氏は、「レオン＝ブルム政府による一連の経済－社会政策、とくに金融－財政政策は、フランスの二百家族金融寡頭制の頑強な反撃を招いた。生産サボタージュや大資本の海外逃避が相次ぎ……」（一〇一頁）と、いわば大資本陰謀説で生産不振や資本海外流出を説明しておられる。これはフランスの左翼系の諸著作でもしばしば見られる説明である。しかし、すでに評者や中木康夫氏がそれぞれ明らかにしたようにこの説明は多分に「責任転稼の論理」（中木）である。資本流出はむしろブルム内閣の経済政策がフラン貨の信用に打撃を与えた時点で激化したのであり、それまでは資本も日和見を決めこんでいたのである。(3) したがって大資本陰謀説は事実の半分も説明しうるかどうか。経済的理由がより重視されてしかるべきであろう。(2)

第三に、氏は一九二〇年代から三〇年代初期までのフランス共産党の党勢の絶え間ない下降の理由を、レーニン主義ないし「ロシアでの経験」が各国に「極めて図式的、機械的な形で適用されようとしたこと」（一五三頁）に見出しておられるようである。今日こうした指摘の妥当性を否定する人は多くあるまい。しかし、問題は、単なる適用の不適切がこれだけの党勢不振の十分な説明たりうるかどうかであり、レーニン主義自身の中にそうした不都合を生み出す背景を遡って検討することが必要ではないかということである。ちなみに氏は正当にもスターリン主義がコミンテルンとその各国支部に及ぼした否定的影響に言及され、また「いわゆるレーニン型統一戦線構想とスターリン型統一戦線構想との断絶」（一〇八頁）について語っておられる。しかし、一九三〇年代の反ファシズム統一戦線、さらに現代の「先進国革命論」までをレーニンの統一戦線構想の延長ないし発展

として説明すること――フランス共産党系の文献にしばしば見られる――には何か非歴史的なものが感ぜられる。（平田氏自身は三〇年代の統一戦線を現代の先進国革命論の萌芽形態にすぎないとして一応区別される）例えば、人民戦線構想の「基本的枠組となる筈のもの」をすでに一九三四年一月のロシア共産党第十七回大会でのスターリン報告に見出した山極潔氏の重要な指摘[4]に本書が言及していないのは残念である。もし言及がなされていれば人民戦線を単純にレーニンの統一戦線構想の発展と見ることはできない筈であり、逆に一九三〇年代の統一戦線戦術のスターリン主義的性格という視角――本書の基本的論旨とややことなる視角――が浮かび上がってきていたのではなかろうか。同様に、反ファシズム統一戦線戦術とソ連邦の対外政策との密接な関連――欧米学界では一部の親共産党系史家（例えばJ・フォーヴェ）も認める常識である――について本書が唯一度（一九六頁）それもほとんどついでのようにしか論及していないのはやはり奇異な感を与える。肯定するにせよ、否定するにせよ、人民戦線戦術の本質を考える上で避けて通れない問題だったのではなかろうか。

四

著者は、「今までのフランス人民戦線政治史に関する研究は、全国レヴェルでの、それもとくにパリ中心の域を一歩も出ていなかった」（二七七頁）と指摘され、「地方及び地域レヴェルでの研究」の必要、さらに、「民衆の深部から見た人民戦線」、「下部から見た人民戦線」（同頁）の研究の必要を訴えておられる。氏の場合、この提言は「フランス人民戦線の場合、下部レヴェルでの運動が基本軸となって、中央及び全国レヴェルでのその後の発展方向が大きく規制されていったからである」（同頁）との認識――私見によれば一部前述もしたように、誤りではないにしても問題を含む認識（詳細は前掲拙著第一章を参照されたい）――が背景にあるわけであるが、それをひとまずおくとして一般論として見れば氏の提言は全く正当であり、民衆ないし民衆運動の視角を重視する最近の内外の研究動向とも合致することは多言を要しない。

しかし、わが国のフランス現代史研究に話を限ってみれば、中央ないし全国レヴェルでのかの地の研究の消化さえほとんど手つかずの分野が少なくないという周知の現状を前にして、地方レヴェルの研究や下からの視角の必要を提唱されても評者などはその趣旨の一定の正しさを認めつつも茫然たらざるを得ない。フランス革命史や十九世紀史のように「上から」の研究が一定の段階に達し、下からの視角により新局面をひらく必然性が存在する場合は話は全く別であろうが、二十世紀フランス史の場合、状況は同じではない。現在われわれにもっとも必要なことは研究上の空白を埋めつつ地道に段階をふんで前進することではなかろうか。研究のための研究、研究の自己目的化（より正確には研究者のための研究というべきであろう）をわれわれが執らないとすれば、最近一部に感ぜられないでもないような新しさのための新しさの追求に走ることなく、欧米の研究動向といえども主

体的に受けとめ取捨選択することが必要ではなかろうか。

以上、本書に対して私が感じた疑問や注文をいくつか書いてきたが、そのことは本書が安心して読める手堅い研究書であることと何ら矛盾しない。じっさい本書の周到な参考文献リストに目を通された方なら私の評価を直ちに裏書きしてくれるだろう。評者は約二十年前、かなり特殊な雑誌に処女論文を発表したとき、著者が早速に目を通しておられることを知り一驚した思い出がある。本書を一読して著者の真摯な研究態度がこの二十年間に全く変っていないことをあらためて確認させられた。評者の怠慢のため批判にばかり頁を費し、本書の長所や興味ある指摘にはほとんど筆が及ばなかったことをお詫びしなければならない。また、批判においてもあまりに評者の立場や好みまでも押しつけたのではないかとのおそれを抱いている。本書に対する私の期待の大きさが要求を多くさせたこともあろう。著者の研究の今後の一層の深化を願って筆をおく。

（一九七八年九月十七日）

註

（1）とりわけ、諸リーグのうちもっとも強力で危険視された「クロワ・ド・フゥ（火の十字団）」のファシズム的性格が最近ほとんど否定されていることが論議に大きく影響している。否定論としては例えば、René Rémond: *La droite en France, de la Première Restauration à la Ve République* I (*1815-1940*), Paris, 1968, pp.208～225, esp. 224, Georges Lefranc: *Histoire du front populaire*, Seconde édition, Paris, 1974, avant-propos de la seconde édition XI, Henri Noguères: *La vie quotidienne en France au temps du front populaire 1935-1938*, Paris, 1977, p.71. とりわけノゲールは当時社会党の青年活動家として火の十字団と日常的に街頭で対決していただけにその否定説は注目に値する。

（2）拙著『フランス人民戦線』近藤出版社、一九七四年、一六一頁。中木康夫『フランス政治史』未来社、一九七五年、（中）、一〇五頁。

（3）「フランの海外流出＝資本逃避を、もっぱら政治的理由（人民戦線への資本の反抗）のみで説明することは正当ではない。人民戦線期でも、フラン価値の上昇期には逆流している。資本流出は、すでに三四年から進行しており、このばあい経済的理由（諸外国通貨切下げによるフランの価値低下と不安定性増大）が主因である。」中木、前掲書、一〇六～一〇七頁。

（4）山極潔「スターリンと人民戦線」（『歴史学研究』第四三五号　一九七六年八月所収）。

拙著刊行以後に発行された主要参考文献は、一〇〇種を越えているが、その主なものは、拙稿「フランス人民戦線と民主主義」鹿児島大学法文学部『法学論集』第十三巻第一号　一九七八年　二十四頁、及び拙稿「フランス人民戦線の理論的諸問題（一）」同『法

学論集』第十四巻第一号　一九七八年　三十三、三十五頁の注記の個所でそれぞれ紹介したが、それ以降の分についてさらに略記すれば、前出文献の外、次の通りである。

Jacques Girault,Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres, Editions sociales,Paris,1977.

René Sédillot, Histoire des socialismes,Fayard,Paris,1977.

Charles Berg,Stéphane Just,Fronts populaires d'hier et d'aujourd'hui,Penser/Stock 2,Paris,1977.

Isaac Aviv,Le PCF dans le système français des années 1930 à la fin de Ⅳe République,in:Le Mouvement social,juil.-sep.1978,no.104,Les Ed.Ouvrières,Paris,1978.

Guy Bourdé,La défaite du front populaire,François Maspéro,Paris,1977.

Bulletin du Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme,N° 2,Année Universitaire 1977-1978, Université de Paris I,Paris,1978.

Jean-Pierre Rioux,Les socialistes dans l'entreprise au temps du Front Populaire:quelques remarques sur les Amicales socialistes(1936-1939),in:Le Mouvement social,jan.-mars 1979, n° 106,Paris,1979.

Alfred Wahl,Les députés SFIO de 1924 à 1940:essai de sociologie,in:le Mouvement social,n° 106,o.c.,Paris,1979.

Marie-Christine Bardouillet, La Librairie du Travail,CHS,François Maspero,Paris,1977.

Bertrand Badie,Stratégie de la Grève,Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques,1976.

Édouard Herriot,Etudes et Témoignages,Publications de la Sorbonne,Paris,1975.

René Bélin,Du Secrétariat de la C.G.T. au Gouvernement de Vichy (Mémoires 1933-1942), Editions Albatros,Paris,1978.

Les Cahiers du bolchevisme pendant la campagnes 1939-1940,Dominique Wapler,Paris,1951.

犬丸義一『日本人民戦線運動史』青木書店　一九七八年。

山極潔「コミンテルンにおける人民戦線戦術の形成過程」『現代と思想』34 青木書店　一九七八年。

広田功「フランス人民戦線と経営者層の対応―「経営者連合」と労働問題―」『歴史学研究』四六四号　青木書店　一九七九年。

村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第一巻　大月書店　一九七八年。
広田功「フランス人民戦線政府の社会・経済政策(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)―「ブルムの実験」の展開―」中央大学『商学論纂』第二十巻第二号、第四号、第五号　一九七八年、一九七九年。
広田功「フランス人民戦線の経済政策」『経済学批判』5「特集一九三〇年代」社会評論社　一九七九年。
北原敦「コミンテルンと現代史」『日本読書新聞』一九九三号　一九七九年二月。
東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』5「ヨーロッパの法体制」東京大学出版会　一九七九年。
塩川伸明「最近のスターリン体制研究」『歴史学研究』四六七号　青木書店　一九七九年四月。
東京大学社会科学研究所編『現代社会主義　その多元的諸相』東京大学出版会　一九七七年。
斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社　一九七九年。
向井喜典「一九三六年のフランス社会政策(Ⅰ)―「人民戦線」内閣の政策経験―」岡山大学『経済学会雑誌』第十巻第三号　一九七八年。
『史学雑誌』第八十八編第五号　一九七八年の歴史学界―回顧と展望―　山極潔、木下賢一論稿　一九七九年。
西川長夫「フランス・ファシズムの一視点―ドリュ・ラ・ロッシェルの「ファシスト社会主義」について」『思想』六六一号　一九七九年。
サンティアゴ・カリリョ、高橋勝之、深澤安博訳『「ユーロコミュニズム」と国家』合同出版　一九七九年。
広田功「フランス人民戦線とフランス銀行改革」『中央大学九〇周年記念論文集』一九七五年。

(3) Cf.Bulletin du CHS,o.c.,p.4.Cf.Informations scientifiques,Le Bulletin du Centre d'Histoire du Syndicalisme, in:Le Mouvement social,n° 104, juil.-sep.1978,p.115. なお、同文のものとして、Cf.Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez,n°20-21,1977,pp.330-334.

(4) Cf.Bulletin du CHS,o.c.,pp.4-5.

(5) Cf.Ibid.,pp.5-7.

(6) Cf.Ibid.,pp.9-11. なお、最近のフランスにおける大学制度及び大学教育等については、例えば、深瀬忠一、中村睦男「資料フランスの最近の公法学の教育および研究・文献覚え書き(一九七七-一九七八)」『北大法学論集』第二十九巻第二号　一九七八年一八七-二〇六頁、新倉俊一他編『事典現代のフランス』大修館書店　一九七七年　二三七-二四〇頁、等を参照。

(7) Cf.Informations scientifiques,Le Bulletin……,o.c.,p.115.

(8) Cf.Bulletin du CHS,o.c.,pp.14-15, 18-19, 22, 24-28, 30, 34-36, 39-41, 43-44, 48-50, 54-55, 57, 63-64, 67.

(9) Cf.Informations scientifiques,Bibliographie régionalisée pour une étude de l'implantation du Parti communiste français entre les deux guerres,in:Le Mouvement social,n° 101,oct.-déc. 1977,p.126.

(10) Cf.Jacques Girault,Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres, Editions sociales,Paris, 1977,p.7. この編著の簡潔な紹介とそれへの極く短い批評については Cf.Jean-Louis Robert,Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres,in:Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez,n° 23,Paris, 1977, pp.196 et suiv.

(11) Cf.Informations scientifiques,Bibliographie……,o.c.,p.126.

(12) Cf.J.Girault,o.c.,pp.10-11.

(13) Cf.Ibid.,p.13.

(14) Cf.Ibid.,p.18.

(15) 拙著　前掲書　一三九頁以下参照。

(16) Cf.J.Girault,o.c.,p.28.

(17) Cf.Ibid.,p.31.

(18) Cf.Ibid.,p.33.

(19) Cf.Ibid.,p.47.労働者主義については Cf.J.-L.Robert,a.c.,p.198.

(20) Cf.Ibid.,p.48.

(21) Cf.Ibid.,p.49.

(22) Cf.Ibid.,p.50.ソ同盟の経験の一義的参照については Cf.J.-L.Robert,a.c.,p.198.

(23) Cf.Ibid.,p.57.

(24) Cf.Ibid.,pp.61 et suiv.

(25) Cf.Ibid.,p.64.

(26) Cf.Ibid.,p.109.

(27) Cf.Ibid.,p.110. Cf. Annie Kriegel, Communismes au miroir français, Éd. Gallimard, 1974, p.136.
(28) Cf.J.Girault,o.c.,pp.119 et suiv. 第三次産業関係住民の規模及びガール街の強化とL＝モンジョーヴィ L. Monjauvis の人格の結び付きを強調する必要を指摘したものとして、Cf.J.-L. Robert,a.c.,p.202.
(29) Cf.Ibid.,p.126.
(30) Cf.Ibid.,pp.147 et suiv.
(31) Cf.Ibid.,p.174.
(32) Cf.Ibid.,pp.179 et suiv.
(33) Cf.Ibid.,pp.205 et suiv. なお、Cf.J.-L. Robert,a.c.,pp.179,204.
(34) Cf.Ibid.,p.226.
(35) Cf.Ibid.,pp.235 et suiv.
(36) Cf.Ibid.,pp.273 et suiv.
(37) Cf.Ibid.,pp.301 et suiv. なお、ほぼ同文のものとして、Cf. Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez, n° 20-21,o.c., pp.335-348.
(38) 登録有権者とだけでなく、実際に投票した者（投票者、意思表示者）との対比における得票率の必要を説くものとして、Cf. J.-L.Robert,a.c.,pp.197,205.
(39) Cf.J.-L.Robert,a.c.,p.200.
(40) Cf.Ibid.,p.201.
(41) 拙著　前掲書　二七七頁参照。
(42) 例えば、加藤晴康「学界動向　最近のフランス史における社会主義・労働運動の研究について」『史学雑誌』第七六編第七号　一九六七年　四五－四六頁参照。

〔付記〕　この雑誌名は、社会運動及び労働組合運動史研究所雑誌（旧労働組合運動史センター雑誌）第二号　一九七七－一九七八年大学年度 Bulletin du Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme (CRHMSS) (anciennement Bulletin du Centre d'Histoire du Syndicalisme) N° 2, Année Universitaire 1977-1978 となっている。本雑誌は、タイプ印刷による三三二頁に上るB5版で、前号に較べおよそ一〇〇頁増となっている。目次は、社会運動及び労働組合運

動史研究所理事会報告、同研究所規程、一九七七－一九七八年度活動報告、一九七七－一九七八年度財政報告、メキシコ大会報告、研究所提出高等研究課程終了証論文、修士号論文及び学位論文リスト（補足）、現代社会運動関係もしくはその解明に貢献し得る修士号論文、修了証論文及び労作リスト（1）地域研究、（2）国内もしくは国際研究）、一九四四－一九四八年度労働組合組織文書に関するアンケート（1）J－L＝ロベール J. L. Robert による問題提起、（2）A＝ラクロア A. Lacroix 及びJ－L＝ロベールによる労働総同盟文書、（3）A＝ベルグニィウ A. Bergounioux による労働総同盟－労働者の力文書、（4）M＝ローネイ M. Launay によるフランス民主労働同盟とその参考資料）、J＝ジローによる一九三〇年代教員指導者（ミリタン）に対するアンケートから成っている。本誌の内容は、次の号に掲載予定の拙稿「フランス人民戦線研究の新視点」（仮題）の中に取り込むことにしている。